

ベノ・ヴァーレンの地理思想  
——『日常的地域化の社会地理学：グローバル化、  
地域、地域化』を中心として——

森 川 洋\*

Die geographischen Gedanken von Benno Werlen  
—— unter besonderer Berücksichtigung der “Sozialgeographie  
alltäglicher Regionalisierung. Bd.2” ——

Hiroshi MORIKAWA\*

目 次

- I. はしがき  
II. 『日常的地域化の社会地理学：グローバル化、地域、地域化』の概要  
III. 「主体重視の社会地理学」に対する批判  
IV. 筆者の印象と疑問点—むすびにかえて—

I. はしがき

Werlen(1997, S. 79)も指摘するように、1980年代における人文地理学論争は、主要地理学者すべてが参加して行われた英語圏に比べると、ドイツ語圏ではそれほど活発ではなかったし、英語圏にみられる新しい地域地理学再興への動きに参加したドイツ語圏の地理学者はほとんど誰もいなかった。しかし、大学紛争最中の1969年に開催されたドイツ地理学会キール大会の事件以後しばらく鎮静化していたドイツ語圏の地理学でも、新たな地理学への胎動が現れてきた<sup>1)</sup>。Eisel (1980) や Klüter (1986) らは、Bartels (1968) に出発点をおきながらも Bartels を乗り越えるかたちで、人文地理学の「社会科学化」のプロジェクトを発展させてきた(Hard,1998)。Wirth(1981)は「空間を直接対象としない社会地理学」については触れていないが、行為を重視した人文地理学の発展を提唱した。そして、今日こうした新しい人文地理学の動きの中でとくに注目されるのが Werlen の「日常的地域化の社会地理学」である。

それは、Werlen がチューリヒ大学に提出した教授資格論文で、叢書『エルドクントリヘス・ヴィッセン』に3部に分けて刊行されたものである。1995年には上記叢書の第116

---

\* 福山大学経済学部：Faculty of Economics, Fukuyama University

巻として『日常的地域化の社会地理学』第1巻（副題は「社会と空間の存在論について」、262頁）を刊行し、1997年には第2巻（副題は「グローバル化、地域、地域化」、464頁）を刊行し、さらに1999年には、『日常の地理－経験的調査結果－』（Werlen, 1999）を刊行した<sup>2)</sup>。このほか、1987年には学位論文『社会、行為、空間－行為重視の社会地理学の基礎』<sup>3)</sup>も『エルドクントリヘス・ヴィッセン』第89巻として刊行しており、Werlenは当時から一貫して行為重視の社会地理学の構築に努力してきた。学位論文と教授資格論文を合わせたページ数は、著書にして1000頁を超える。第2巻の末尾にあげた引用文献をみると、Werlenは1995年には－内容的な重複はあるとしても－1年間に11篇もの著書・論文を発表しており、いかに精力的に活躍しているかが理解される。1995年には Wälty, S. とともに、『文化と空間－理論的アプローチとインドネシアにおける実証的な文化研究』を編集し（Werlen u. Wälty, 1995）、1998年には『社会地理学序説』を上梓している（Werlen, 1998）。

『日常的地域化の社会地理学』第1巻・第2巻がドイツ語圏地理学界にいかに大きな刺激を与えたかは、書評などをみても明らかである。第1巻と第2巻を合わせた書評として Oßenbrügge (1997), Hard (1998), Brenner (1998) があり、第1巻についても Weichhart (1996) や Hard (1997) などの書評がある。また、Weichhart (1997) や Arnold (1998) は内容紹介をかねて書評をしており、英語圏でも Gregory によって注目されている（Oßenbrügge, 1997）。さらに、第51回ドイツ地理学会ボン大会（1997年10月7日）では、「Werlen 自身が批判に答える」特別フォーラムが企画され、Blotevogel・Oßenbrügge 両氏が批判者として討論に参加し、多くの地理学者を集め、ボン大会のハイライトの1つとなった。フォーラムでは討論の合意はえられなかったし、評価もさまざまであった。そして、その討論内容は企画者 Meusbürger, P. の編著『行為重視の社会地理学』として出版され（Meusbürger, 1999）<sup>4)</sup>、Blotevogel (1999) は「社会地理学のパラダイム・シフトか－ヴァーレンの行為重視の社会地理学に対する批判－」と題する論文を寄稿している。

Benno Werlen は1952年生まれのスイス人で、大学では地理学、教育学、ドイツ文学、フランス語、教育心理学、人類学、社会学、経済学を学び、1973年に小学校教員ディプロム、1976年に中学校教員ディプロム、1980年に「社会科学・地理学における機能主義」で修士号（Lic.phil. I）<sup>5)</sup>を取得している。1986年には上記の論文で学位をとり、1994年にチューリヒ大学に上記の教授資格論文を提出した。そして短期間日給講師を勤めた後、1997年から旧東ドイツのイエーナ大学地理学教室の社会地理学講座担当教授を勤めている。専門分野は人類地理学、集落地理学（農村集落地理学）、社会地理学で、研究領域は主としてヨーロッパである<sup>6)</sup>。

『日常的地域化の社会地理学』第2巻は Giddens の構造化理論によるところが大きく、近代末期<sup>7)</sup>の社会存在論に基づく新たな社会地理学を構築しようとするものである。第1巻で述べているように、グローバル化した人々の日常的行為によって起こる地域的活動の社会地理学<sup>8)</sup>、つまり「主体重視の社会地理学 (subjektzentrierte Sozialgeographie)」を構築しようとするものである。第1巻では副題が示すように、社会哲学的な社会理論の基礎について論じた。そこでは、新たな社会概念の導入のほかに、図1にみられるように、伝統的社会と近代末期社会の対比や古典的空間概念に関する深い考察がある。第2巻では、彼の提唱する行為重視の社会地理学にとっての基本的概念を提示し、伝統的地理学や新しい地域地理学を批判することによって自己の社会地理学の正当性を主張する。第1巻や Werlen (1999) と比べると第2巻の方がはるかにページ数が多く、第2巻に内容的な中心があるようにみえる。

筆者は1997年に「ドイツにおける地誌学の研究動向」(森川, 1997)を紹介したとき、Werlen が「行為重視の社会地理学」を提唱し (Werlen, 1987, 1995a), 学界から大きな反響を受けていることを知った。したがって、当初『日常的地域化の社会地理学』第2巻の書評を書くことを考えていたが、その概要を述べたうえで評価を含めて紹介する方がドイツ語圏の新しい人文地理学の動向を考察するのにより適切であると考え、上記のタイトルでもって報告することにした。ただし、地理学だけでなく哲学・社会学にわたる概念や術語が難解なため、理解できる範囲にとどまる。

図1 伝統的生活様式と近代末期社会の生活様式との対比

伝統的生活様式	近代末期社会の生活様式
1. ローカルな社会が信頼ある行為的文脈を形成する	「グローバル村落」が主として匿名の経験文脈や行為的文脈を形成する
2. コミュニケーションは主に対面接触による	抽象的システム (貨幣やエキスパートシステム) が大きな時空間的距離を超えた社会関係を可能にする
3. 伝統が過去と未来を結合する	日常的ルーチンが存在確信 (Seins-Gewissheit) の保持に役立つ
4. 近親関係が時間的にも空間的にも社会的な生活様式を固定化させ、組織原理をなす	グローバル化した世代文化への参加が可能である
5. 社会的地位の割当ては主に出身、年齢、性別による	社会的地位の割当ては主に生産過程の枠内で起こる
6. 地域間のコミュニケーションは少ない	日常生活様式では世界的コミュニケーションを利用する
7. 生活様式は空間的にも時間的にも「定着」している	生活様式は空間的にも時間的にも「脱定着化」している

出典：Werlen (1995), S.104, S.134 の2つの Übersicht の統合による。

## II. 『日常的地域化の社会地理学：グローバル化，地域，地域化』の概要

本書の構成は「はしがき」の後6章に分かれる。「はしがき」(1~24頁)では研究目的や概念説明の後、各章の簡単な内容の紹介がある。Werlen (1997)によれば、今日の社会・経済のグローバル化のもとで、人文地理学の古典的な概念は社会存在論的基盤を失ってきた。彼はまず、今日の社会を伝統的な「地元に着した (lokal verankert)」生活様式と近代末期の「地域への定着を脱した (entankert, disembedded)」生活様式とが並存したものとみる(図1参照)。地域化 (Regionalisierung)とは主体の地域的な活動であり、従来のように空間区分を意味するものではない。それはまた、世界を自己と関連づける社会的実践である。近代末期のグローバル化した生活においては、日常的地理形成 (alltägliche Geographie-Machen)は「世界との結びつき (Welt-Bindung)」のなかで行われる。ここで地理形成とは、人々の生活行為によって歴史がつくられるように、地理(地域)が形成されていくことを意味する。人文地理学の研究目的は、この日常的な地域化の過程を体系的に整理し検討することであると考える。

### 第1章 地理学と地理形成 (25~39頁)

この章では、日常的地理形成の研究が従来いかに行われてきたかについて考察する。Werlenによると、空間よりも人間活動そのものを地理学の研究テーマとしてはじめてとりあげたのはHartke (1956, 1959)であり、地理学のコペルニクスの転回を試みた人として高く評価する。すなわち、Hartkeは自然的指標を政治行政や地域の境界設定に利用するよりも、人々の日常的なルーチン行為の空間的パターンやその到達範囲がそれに利用されるべきであるとした。彼は、すべての人間はある特定の社会集団—主として職業グループからなる—に所属し、その支配的な価値観や規範を考慮した活動をもって自然的世界に働きかけるので、自然的事実に対する行為者の評価の方が自然的状況そのものよりもより重要であると考えた。Hartkeにおける社会地理学の目的は、「社会集団的に決定された労働過程の範囲」を発見すること、「同じ行為をなす社会集団の空間」を発見することであった。主体重視の地理学にとっては、空間や空間的秩序を研究するよりも日常的地理形成を研究課題とするのが適当である。

しかしながら、Hartkeも自認するように、社会的観点からの分析指標は詳細で分析に適したものとはいえなかった。社会地理的グループからの説明は、社会に関する知識を大幅に改善するにはあまりにも不十分であった。それは、①彼の地域区分法が伝統的な地図学的方法に固執したし、②脱定着化した近代末期の社会においては、空間的に説明される

範囲は次第に制限されてきたにもかかわらず、彼は農村調査を中心としたため伝統的社会に偏した発想であることを自覚しなかったので、地域のもつ社会的特性を十分に理解することができなかった<sup>9)</sup>。

したがって、Hartkeは地域化の社会的意義について問題にすることなく、社会の空間的特性だけを取りあげた。今日の近代末期社会における地域形成は、もはや文化景観的指標でもって直接理解することは困難である。一見地域的にみえる現象でも、完全にローカルな関係から形成されたものばかりではなく、グローバルな関係を表現したものといえる。現代は、景観解釈の困難 (*crise de la lisibilité du paysage*) な時代なのである。

## 第2章 地域と科学的地域形成 (41~67頁)

本章では、①伝統的地理学<sup>10)</sup>、②空間科学的地理学 (論理実証主義地理学)、③行為重視の社会地理学の3つに分けて地域や地域形成に対する考え方を整理し、本研究の目的を明確にする。

伝統的地理学では、その社会存在論は伝統的社会に根ざしたものであった。そこでは、自然と文化・社会がまとまりをもって成長し、空間 (地域) を形成する。そうした空間的まとまりは、同時に国家的組織の形成における意識形成の容器となるので、社会的文化的関係の空間的記述 (地誌) は適したものであった。その場合には、地理的決定論的な説明ができないところでも、Vidalに代表されるように、人間・自然関係の説明が中心的テーマとなり、伝統的社会にとって自然は必要条件とみられていた。Vidal (1903) の『フランス地理概要』はそうした伝統的地誌書の代表といえる。伝統的地理学においては、総合的な地域区分法として境界地帯法 (*Grenzgürtelmethode*) が利用され、それによって分類された地表部分はそれぞれ自然発生的に特定の特性を備えた「自然な実在」であった。したがって、地域は研究者による構築物とはみられなかった点では、今日の一般的な認識とは異なっていた。

一方、空間科学的地理学の研究においては空間法則の発見が最重要課題であり、とりわけ「距離の決定要因」が重要視された。社会過程の空間分析では、社会的規範、文化的価値、生産費など社会文化的・経済的所与の空間化が前提とされるべきであるが、そうした社会的内容自身に関する研究は行われず、社会関係は象徴的な表現にとどまった。また空間科学的地理学においては、伝統的地理学にみられたような、あらゆる目的に利用できる総括的な「真の地域」を求めることをやめて、それぞれ目的をもった地域区分に置き換えられた。その際、たしかに地域の境界設定や概念規定については改善されたが、空間理解については以前と変わりなく、空間・社会関係の見方も前近代的な状態にとどまった。計

量的地域区分法の意味は乏しく、その地域区分法は最初もっぱら西洋社会の農村地域に適用されたが、後には第三世界にも用いられた。

近代末期社会の中心的特性である脱定着化は、社会現象を空間的間仕切り (räumliche Kammerung) から解放することになった。主体的行為者はほぼ任意の場所でグローバルな情報流の一部を入手し、その情報を用いて生活様式を改変し、新たな日常的ルーチンを設計するようになる。そこでは、多様な個人の生活スタイルは空間的に定着されることなく現れるので、地域的現象とはならず<sup>11)</sup>、文化的差異は地域的差異として表現されなくなった。また、空間も地域もそれ自身所与のものとはいえず、社会地理学にとっては、日常的な地域形成の社会的意義が学問的に興味あるテーマとなった。したがってはや、社会地理学は空間科学として理解されるのではなく、行為的文脈の空間的側面に関心をもつ学問とみられる<sup>12)</sup>。

すなわち、Werlen が主張する「行為重視の社会地理学」では、空間は直接的には研究対象とはならない。空間それ自身が学問的説明の対象ではなく、むしろ主体の行為が中心に置かれる。かくして Werlen は、先に与えられた地域や空間が一切を包括する容器として理解された従来の発想から距離をおき、地域や空間を社会的行為の中で初めてつくられる現象、つまり地理形成の成果とみようとする。その場合に、社会地理学が他の社会科学と異なるのは、行為者による行為的文脈のもつ自然的物的成分に注目し、それに特有の解釈を与えることである。行為にとって重要な人工物の空間的配列の分析にも関心をもつ。彼は、「空間を直接対象としない地理学」<sup>13)</sup>の研究によっても、地理学の学問としての地位が変化することはないと考える。時代に適合した社会的状況を考慮するためには、行為重視の見方が地域地理学に導入されるべきであると主張するのである。

### 第3章 「新しい」地域地理学 (69~139頁)

本章では、ドイツ語圏や英語圏における「新しい」地域地理学の動向に注目する。ここでカッコつきの「新しい」地域地理学とするのは、真に新しいものとはいえないとの Werlen の自負が込められているものと理解される。本章で新しい地域地理学をめぐる論争をとりあげるのは、それによって従来の空間的アプローチがうち砕かれ、主体中心的な見方への転換が用意され、「地域化の社会地理学」の発展にとって重要な先行投資となったと考えられるからである。

1) 「ドイツ語圏の地理学論争」 ここでは、Bartels(1968)の教授資格論文に従って地域地理学の死滅が叫ばれた、ドイツ地理学会キール大会(1969年)以後の地域地理学の動向を考察の対象とする。それは、1980年代初めの新しい地域地理学をめぐる論争として始ま

り、今日に至るものである。

新しい地域地理学を求めようとする動きはまず Wirth (1979) を通して現れた。彼は種々の地域に関する一回性の記述を地域地理学の最重要課題として強調し、地理学全体にとっても重要であるとした。しかし、新しい地域地理学の研究方法は明確には示されず、社会学的行為理論の空間化を主張したにとどまり<sup>14)</sup>、彼の主張は Bartels (1980) や Bahrenberg (1979) によって鋭く批判された。

続いて1980年代後半になると、地域意識と地誌に関する研究グループが発生し、地域をめぐる論議は2つに分化した (Blotevogel et al., 1986, 1987)<sup>15)</sup>。この研究の中心は、自然的世界と人工的世界との関係に関する特徴を捉えるよりも、意識的事実の地域的關係を把握し、「同じ地域意識をもった空間」を発見することにあつた<sup>16)</sup>。Pohl (1993) は、地域的アイデンティティの意義が増大するのはポストモダンの現れとしてそれらの研究を積極的に評価したが、彼の主張の中心は空間科学的アプローチによる法則追求に反対することであり、「地域地理学の危機」を克服しようとしたものではなかった。

ポストモダンの地域地理学については Danielzyk et al. (1987, 1989, 1990) や Krüger (1986, 1988) が新しい地域研究の方向を示し、地域意識の研究はもはや地域研究の対象ではなくなったとする。その場合に、中心に位置する専門的な理論検討にあまり触れないのは、ドイツ語圏において再生された地域地理学の特徴の1つといえる<sup>17)</sup>。ドイツの地域地理学は、国土記述や分析・記述的結合の内部論理においては Hettner 以来決定的な改善がなされたとはいえない<sup>18)</sup>。空間科学的「革命」以前の地誌学の概念と比較した場合にも、社会理論的研究に対する配慮は認められるものの、一貫した論議はなされていないという。

2) 「英語圏における論争」 ここではなぜか Johnston, R. の研究には触れていないが、Buttimer, Gregory, Pred, Thrift らの地域地理学に関する研究について詳しく紹介している。それらは、①現象学的ないしは人文主義的考察 (Buttimer)、②構造主義的アプローチ<sup>19)</sup>、③構造化理論ないしは批判的路線 (Thrift, Pred, Gregory)、④実在論的アプローチ (Sayer, A.)、の4つの学派に区分される<sup>20)</sup>。このうち、本書で示す行為理論的見方に近いという理由で、人文主義と構造化理論の両アプローチについて詳しく検討している。

周知のように英語圏では、伝統的地域地理学は科学性を欠くものとして空間科学的地理学によって否定されたが、空間科学的地理学の成果も大きいとはいえなかった。計量的手法の普及に貢献したのはたしかであるが、それが求めた空間的法則は社会の空間的構造やプロセスを説明するには不十分であった。したがって、空間科学的地理学を批判することによって、地域地理学は再び地理学理論の中心的課題の1つとなった。その再生を意図した最初の人々が Buttimer (1969, 1974) である。彼女は空間科学的地理学に比して主観的日

常的意識形成をより強く考慮すべきであると主張し、地域地理学論争の発端として Vidal らフランス地域研究への回帰を説いた。

次の Gregory は Gregory (1978) の最後の章で、法則性を求めるよりも批判的地域研究を主張した。彼は、「われわれが知識としてまた政策的に地域に介入するためには、地域的な社会形成や地域的接合 (regional articulation)、地域変化の構造について知る必要がある」<sup>21)</sup>とし、この3つの重点をもって新しい地域地理学の研究領域とした。Gregory は『地域変化と産業革命—ヨークシャー羊毛工業の地理』の実証研究 (Gregory, 1982) でもって、異なった地域発展について考察するとともに、社会の空間的分化メカニズム、とくに階級関係の地域的差異について明らかにした。この実証研究は Pred (1986) とともに新しい地域地理学の先駆的研究に数えられるが、理論部分と実証部分の関係が緊密とはいえないところに問題があるという。

次の Pred は、Hägerstrand, T. の時間地理学をへて新しい地域地理学へ接近した後、Giddens の構造化理論への関心を加えることとなった。Pred の主たる関心は、「時間地理学による場所と地域の生成 (becoming) および構造化過程の解釈と日常的展開」にあり (Pred, 1984, p.30), 「場の理論」が地域地理学における実証的研究の理論的枠組みであると考えた。ここでは、①「制度的プロジェクト」、②個人史形成の分析、③「場所の感覚」の3つが研究の中心をなすものである。

最後の Thrift の研究は文脈的地域地理学 (kontextuelle Regionalgeographie) と呼ばれ、Werlen が最も重要視するものである。Thrift (1983) ではまず Giddens を中心とする構造化の社会文化学的理論を検討し、その後の地域地理学に関する考察でもこの見解を維持するが、ポストモダンの社会存在論に強い関心を示す。Thrift (1983) は「再興された地域地理学は人や場所、因果関係に関する Vidal の見方をなお重要なものとみており、それを新しい理論的枠組の中に導入すべきである」とする。

Thrift は、空間構造は社会構造の投影であるとの前提に立って、空間構造や活動舞台=場も「社会的なもの」と考える。彼は再興地域地理学に関する最初の論文の中で現実の社会存在論的条件を示し、論文「New regional geography (1)~(3)」においてそれをさらに深化させ、ポストモダン社会の社会存在論について述べている。彼の考察の出発点は、1980年代初めに現れた Gregory の学問的刺激と概念提示に始まる新しい地域地理学の論議に対して、批判的立場をとることをもって始まる。彼は、ポストモダン社会のもつ第1の特徴はモビリティにあると考え、地域住民のモビリティを最も重要な尺度とみる。第2の重要な尺度は、ローカルなもの (Lokalen) とグローバルなもの (Globalen) との相互作用形態に端的に現れるように、空間と時間とがもはや並列して結びつかないことである。



以上4名の研究に対して、Werlenはそれぞれ厳しい批判を加える。たとえば、Buttimerについてはあまりに急進的で、現象学の適用形態が十分とはいえないし、Gregoryについては社会構造の投影としての空間構造に注目し、それを最終的には規範批判的理論(normativ-kritische Theorie)と結合させているが、規範的な標準がいかにして確定されるかについては説明していない。また行為と構造との関係が不明瞭であるほか、空間構造と社会構造との関係についても考察が不十分であるという。Gregoryが地域構築において権力関係を地域分析に導入したのは注目すべきであり、その地域内だけでなく中心的な地域変化の過程を追うが、構造化理論の立場からすると一貫性がなく、工業化の社会存在論的關係を説明するには不十分であるとする。

またPredは、構造化理論を地域形成の実際の調査には使用しようとはせず、その理論の中核的構成要素やその特徴を空間的に説明し地域的に研究することが科学的な地理学の課題であると考えている。とくにスコーネ地域研究の最後の部分において、「社会的なものは空間的なものとなり、空間的なものは社会的なものとなる(Pred, 1986, p.198)」と結論づけている<sup>22)</sup>。そこでは、存在論的な一貫性が欠如する。同様に問題になるのは、「人々が歴史や場所をつくり、同時に、人々は歴史や場所によってつくられる(Pred, 1986, p.198)」とすることである。行為理論的には、主体の行為に関する分析に集中すべきであり、場の理論(theory of place)は行為理論(theory of action)によって置き換えられるべきであるとWerlenは主張する。

ThriftもGregoryやPredと同様に、空間中心な考察方法をもった地理学者として位置づけられる。しかも、地理学の体質改善という点では社会理論との関係が不十分であり、空間を適切に概念化する必要がある。Thriftにおいては、地域地理学への行為主体の一貫した導入はみられるものの、あまりに支配的な空間中心な見方でもって遮られているとみる。また、近代末期の脱定着化メカニズムを深く考察するためには、モビリティの重視は十分とはいえない。主体の動き(移動)のほかに、そのプロセスが考察されるべきであるという。

Thriftはあらゆる社会文化的なもの、主体的なものを空間のなかで考察する。行為も地域の中で行われ、文脈も地域の中に存在する。彼にとっては、空間や地域は固定したものであり、空間のなかでの社会的事実に関する説明は、社会的に均質に作用するものである。しかし、生活様式はもはや社会的に均質なかたちで存在するものではなく、空間的に区切られた存在ではないため、社会文化的なものを空間的にみることは真実みを欠くことになる。

Thriftも、Vidal地理学と同様に文脈を強調することによって空間科学批判を行うので、

彼の新しい地域地理学は文脈的地理学を重視する点においては Vidal 的な伝統的地域地理学を強調することになる。しかし、空間重視の文脈的地理学は真の文脈的地理学とはいえない。真の文脈的地理学は日常的地理形成の科学的調査に基づき、行為重視の地理学を前提とするからである。それは Vidal を継承する地域地理学では不可能である。一瞥の限り文脈的地理学がある程度の妥当性を示すのは、地域は比較的多くのロカール (locales, 場) の集合からなるという Thrift の発想や、構造化理論の中心概念の使用に関係しているためであろう。彼によれば、ロカールは自然的基礎と社会文化的・主体的解釈とが主体を通じて統合されたものである。主体的内容と社会文化的内容はもはや付随的な特性ではなく、その物質に内在するものである。また彼にとっても出会いの場は、Pred の地域と同様に、前もって与えられたものである。しかし上記のように、Thrift が現実分析に行為主体を導入したことは、研究の一步前進であったと評価している。

ただ問題なのは、新しい地域地理学の研究が近代末期社会の新しい社会存在論的条件のなかで考えるべきであるにもかかわらず、すべての新しい概念は従来の地域理解に向けられているため、その試みの多くは失敗とみられることである (Bradshaw, 1990)。新しい地域地理学は「地域的社会関係の研究」として認められるが (Gilbert, 1988)、そこには伝統的地理学の基本的論理が保持されているのである。

Gilbert (1988) は、今日の技術発展のもとで地域に対する自然条件の影響は低下したとしても、社会的生活条件の差異はますます増大しており、各社会のなかで地域的差異は常に存在すると主張している。この説明は一見妥当するようにみえるが、地域地理学的にはそれでもって十分な説明とはいえない。近代末期社会では特定域内の少数の人々にとってだけ同様の均質的な生活様式が存在するので、地域的にみて均質的と考えられる部分は小範囲にとどまる。地域という形態は共通であるものの、それは主体的につくられ、その意義や内容は多様化しているのである。したがって、Gilbert (1988) が「構造化理論は地域について独自な見方を提供する」というのはむしろ誤りであり、その表現が妥当するのは日常的地域化の研究に対してである。

「地域化の社会地理学」と地域地理学との関係についてみると、脱定着化した社会存在論的諸条件はもはや地域地理学には適合しないので、地域地理学は「地域化の社会地理学」によって完全におきかえるべきできるとの議論もある。しかし、この点に関する結論はえられていない。とはいえ、新しい地域地理学は、あらかじめ境界を決められた社会的現実の「地表部分」を考察することはできないであろうと Werlen は考えている。

地域は、制度的に再生産されるので、その地表部分にかかわる特定の構造化過程の結果として捉えられるだろう。こうした地域にとっては、地表空間的条件はさしたる役割をも

たず、空間的な構造化を目的とした社会的行為による社会過程の成果として、物的メディアの配列を説明するためにのみ用いられる。したがって、地域地理学は「地域化の社会地理学」の成果の上に構築されることになるだろう。ここでは、経済的とか政治的とかの行為によってそれに対応した地域が現れるし、それぞれの行為者にとって固有の地域が現れるだろう。「地域化の社会地理学」の考察の結果から生活様式に関するテーマが分化し、それに対応した地域が（研究者によって）再構築されるのである。

Gilbert (1988) によると、「Pred の行論は地域を1つのプロセスとして解釈する方向にある。そのプロセスとは、以前に形成され、その後の実践によって再生産され、次第に変化していく過程である」。しかし Pred の実証研究が示すように、その研究は既存の政治地域に集中しており、その発生や変化は空間的境界の中で調査されることになる。

英語圏地理学では、Buttimer は従来の地域地理学をその権威から解放することに貢献した。Gregory は地域分析のなかで権力的成分を検討し、権威的・配分的資源 (authoritative u. allokativ Ressourcen)<sup>23)</sup> という構造化理論で用いた概念の導入を提案し、地理的現実の分析へ構造化理論を適用した。Pred はあらかじめ政治的に決定された地域の歴史的形成過程を問題にしながら、地域地理学的研究の動態化を促進し、歴史形成と地理形成とを一体的に考えた。しかし「場の理論」に集中することは、このアプローチのさらなる発展・分化を妨害することにもなった。

さらに、Thrift は文脈の導入をとくに強調するとともに、与えられた地理的成分が主体の知的要求にとって重要なことを明らかにした。新しい地域地理学をめぐる論争の中で主体を最も重視したのは Thrift であるが、彼の要求はなお十分であるとはいえない<sup>24)</sup>。彼はモビリティを新しい地域地理学の中心的テーマにしようという意味ではたしかに動態化に導くことにはなったが、従来の概念には社会的現実の静態的説明を多く含んでおり、時空間的に固定した社会形態を前提とするものであった。Hartke の要求とは逆に、ここでは地理形成ではなく、伝統的な「モノの地理」が研究の対象に据えられている。かくして、空間科学的地理学も新しい地域地理学も、その視座の近代化へ向けての懸命の努力にもかかわらず、社会存在論は古いままにとどまっているとする。

こうしたなかで、構造化理論は空間考察にとって、英語圏地理学における論議の重要な統合の場となった。「地域化の過程」研究が地理学にとって重要な課題となるという Giddens の所論は、Gilbert (1988) や Pudup (1988) によって、新しい地域地理学の発展の必要性を指摘するものとして高く評価された。Gregory や Pred, Thrift の考察は、既存の政治地域の変化や発生過程を研究させることになったが、地域化の社会的意義を解明することにはならなかった。社会構築や権力再生産などのために地理形成の意義を説明する

ことは、近代末期における地理学の関心にとって最も重要なことである。

#### 第4章 社会的地域化の構築 (141~213頁)

本章では Giddens の構造化理論に注目する<sup>25)</sup>。それは、主体中心の社会地理学の要求に対応した社会理論であり、かつ新しい地域地理学の発展にとってのガイドラインをもなすと考えられる。本章は①「批判理論としての構造化理論」、②「行為、行為者、意識」、③「身体、行為、空間」、④「構造と構造化」、⑤「地域化の構造と形態」、⑥「日常的な地域化の社会地理学に関する結論」の6節からなり、構造化理論の概念や術語の解説が中心をなす。

Giddens の構造化理論では、社会的生産や再生産は主体の行為によって行われる。Giddens の社会理論構築の背景にあるのは、①主体重視の地理的見方をする事、②伝統的行為理論に対して権力的成分を補充すること、③空間存在論的矛盾について解決することであった。従来の社会理論では地理的決定論に落ち込むことをおそれて、空間的テーマは敬遠されることが多かったが、Giddens は人間的行為を時空間的文脈の中でみようとする。Giddens によれば、日常的行為の多くは直接動機づけられるものではなく、時間と空間のなかで培われた存在意識や信頼が習慣的行為の基礎をなすものである。

Giddens は空間概念としてロカールを使用するが、Werlen はドイツ語では場所 (Ort) ではなく活動舞台 (Schauplatz) に当たるといふ。活動舞台は規模や広がりの意味するものではなく、社会的カテゴリーと空間的カテゴリーとが結合したものである。その場合に、活動舞台に属する地域 (Region) は、あるシンボリック的記号によって境界づけられた状況または日常実践の社会的再生産過程の表現である。地域のなかには、従来の地理学とは異なった表地域 (vorderseitige Region) や裏地域 (rückseitige Region) のような空間概念も使用されている。

Giddens は、メディアの使用によってその場に不在の主体的行為者とコミュニケーションする間接的な相互作用の形態を、空間・時間の距離化 (time-space distancing) と呼ぶ。それには、手紙や電話などの直接的なコミュニケーションの手段としての象徴的記号 (symbolisches Zeichen) と高度な電子技術によるエキスパート・システムとがある。これらの脱定着化のメディアは大きな時空間的距離を超えた相互作用を可能にし、不在者への伝達や金融のコントロールをも可能にする。

Giddens は、構造はあくまでも行為の結果であって構造自体が狭義の創発的特性や行為発生権限をもつとは考えないので、構造主義者が構造自身に地域形成力があるとみることは賛成しない。すなわち、構造はわれわれの活動を外から規制するかたちで決定論的

意義をもつのではなく、あくまでも主体的行為に社会の主たる形成力があるとする。しかしそれは、行為者が社会的行為において、彼らの意思通りになんでも自由にできるという意味ではない。構造は過去の行為の成果であり、実際に行為に対してある程度の制約を課す。主体者の行為は、構造的強制によって制限されるとともに、当時すでに与えられた構造的条件のもとでだけ可能となる。

構造には規則と資源という2つの側面がある。ここでいう資源とは主体者の行為を変化させる能力であり、一種の力である。そのなかには、物的に与えられたものを利用する能力（配分的資源）と、人に対する使用権（権威的資源）とがある。地域化は規範と資源を介して行われるが、構造的特性をうるには時空間的成分が大きな意味をもつ。時空間的文脈や社会的コントロールは、行為を起こさせる要因となり、また行為の結果でもある。Giddensによると、主体的行為者は自分では選択のできない条件のもとで彼自身の歴史をつくるだけでなく、部分的には、以前から存在していた条件や自分では選択しなかった条件のもとで、彼独自の地理をつくるものとする。その点では Hartke (1962) も同様である。社会生活にとって空間的布置は時間的次元と同様に、基本的に重要なものである。

したがって、構造化理論においては地域や地域化に対する発想は、上述したように、われわれがこれまで抱いてきたものとは異なる。伝統的な人文地理学では、行為者の日常的行為に論及することなく特定地域の境界設定を行い、地域区分は重要な研究活動とされた。すなわち、地域化は主体的行為による地理形成としてではなく、空間科学的な発想のもとに計量科学的方法を用いて行われた。これに対して Giddens (1988) は、地理学が空間的形態の抽象モデルをもって地域化の概念を取り替えようとするのは誤りであるとする。彼にあっては、地域化は純粋に空間的概念ではなく、空間と時間の結合したものである。地域化は、いかなる社会的条件の下でこのような空間的組織 (räumliche Gliederungen) を形成したのか、種々の主体的行為者によるそれぞれの行為でもっていかなる意義が生じたのか。上述のように、地域は行為の文脈 (状況) であり、地域化はこれらの文脈や状況が主体的行為者によって社会的に形成されるプロセスである (Werlen, 1997, S.194)。したがって、空間的次元を考慮することによって空間科学的な社会理論を求めるのではなく、むしろ空間的側面に注目する社会的行為の研究が求められるべきである。

かくして Giddens (1988) は、地理学の研究にとって地域化の分析が特に重要な関心事であるべきだと説く。その場合に、社会科学と地理学との共同研究は地域研究ではなく、地域化の研究である。地域化の基本的発想は、地域の時空間的な境界設定であり、その境界は通常象徴的ないしは自然的な標識からなる。それに対して、地域やロカールは一定の限定された境界を示す必要はない。それはむしろ種々変化する境界をもって「社会的に占

抛された」テリトリーであり、固定した不動のエリアではない (Giddens, 1981)。行為重視の発想では、空間的カテゴリーよりも行為カテゴリーが優先し、社会的日常行為の中で空間的側面の重要性が強調される。

また、日常的地域化は社会過程として把握されるので、地域は社会的政治的過程の瞬間的表現といえる。伝統的な地域地理学や空間科学的な地域地理学、さらに新しい地域地理学においては、地域化（地域区分）は地理学者に付与された研究活動であり、彼らの活動の成果とみられたが、そうした見方とは大きく異なる。Giddens は行為の場をなす地表部分を政治規範的に占有することを地域化と考えており、地理的には、主体による社会的制度的行為がテリトリー形成 (Territorialisierung) として理解されるのである。

このようにして Werlen は Giddens の構造化理論に強く依存するが、全面的に依拠するわけではない。Giddens の空間理論には批判的である<sup>26)</sup>。それは、時間地理学の「輸入」によって、いわば「ニュートンの意味での容器空間 (Containerraum)」の概念が構造化理論のなかに含まれることである。時間地理学は、主体を中心としない近代以前の存在論に属しており、容器空間を受け入れることは空間自体が形成力をもつことを意味するからである (Werlen, 1997, S.207)。

## 第5章 グローバル化と地域化 (215～283頁)

本章は、①「理論の理解について」、②「グローバル化した生活様式と地域化した生活様式」、③「日常的地域化の類型」、④「日常的地域化の社会地理学に関する結論」の4節からなり、近代末期社会における脱空間化 (Enträumlichung) の進行や日常的実践と学問的論争 (二重の解釈学) との間の相互の結びつきに対して地理学がいかに対処すべきかについて考察する。

従来空間研究や地域研究においては、主として地表空間の側面から社会文化的事実を観察したが、人々の行為がグローバル化するにつれてその視力を失ってきた。脱定着化メカニズムのもとでは社会的な間仕切りがなくなり、空間的輪郭が次第にぼやけてきたというのがその理由である。しかし、地域化の過程は再定着化 (Wieder-Verankerung) を伴うので、グローバル化に向かうだけでなく、かつてのローカルに区切られた生活はグローバルに伸介された社会関係の中で新たな地域的な活動をすることになる<sup>27)</sup>。

このような状況のもとで、従来空間重視の方法論は今日の社会存在論には受け入れられない点が多くなり、人文地理学研究を人文・社会・文化諸科学の一般的な方法論へ接近させることとなった。伝統的地理学や空間科学的地理学は物質科学や空間科学にとどまるのに対して、日常的地域化の社会地理学においては、地域はラントシャフトと同様にもは

や物質的対象ではなく、社会的構築物である。空間や地域自身は地理学研究の基本的単位ではなく、単位をなすのは空間的構築物の生産（形成）や再生産の問題である。

行為重視の社会地理学にあつては、社会的現実がなにゆえに異なった時間的・地域的条件のもとで種々の形態をとるのかについて説明する、概念的基礎を提供するのが研究の目的である。そこで求められるのは、一連の法則的発言よりもむしろ特定の研究テーマや現存の研究結果について解釈する感覚を養うことである。このような行為理論・構造化理論の考察方法は、人文地理学の研究分野や研究方法に対して新たなものを追加することになる。

第2節では近代末期の社会存在論について考察し、グローバル化は単なる経済的現象だけを指すものではなく、経済、社会政治、文化の3つの側面において遠隔地との連携関係が強化したのが近代末期の特徴であるとする。しかもグローバル化は、ただ単に資本主義の拡大とか西洋文明の発展など統一的な価値体系の発展とみることはできないものとする。

まずは、近代末期の説明のために登場したレギュラシオン理論の限界について指摘する。Oßenbrügge (1997) も注目するように、レギュラシオン理論は構造重視の見方と行為者重視の見方の二重性を克服すべく、構造化理論に近づこうとしてきた。しかし、その理論家たちは行為理論の見方においてほとんど例外なく、主体にとっての制度的基本条件や種々な調整様式を考慮するが、主体自身の行為については考慮していない。近代末期において特に明らかとなった構造主義の問題点は、主体のもつ形成能力を無視することにあるので、それは本質的なところで力を欠く操り人形に譬えられる。脱定着化メカニズムのもとでは、多様な活動調整的な構造が起こるとともに、他方では国内領域のまとまりが次第に消失していくため、従来有効であった社会科学の説明概念は能力を失うことになる。レギュラシオン理論の概念も本来は構造主義的研究方法であつて、もはや近代末期の現実の姿を概念的に把握しうる立場にはない<sup>28)</sup>。これを構造化理論の方向と統一させるには、構造と規則を因果的な構造主義的な見方においてみるのではなく、行為の表現としてみるべきである。最近 Lipietz (1992) はこの方向での研究に努力している。

近代末期社会の「生活様式」は地域的に定着したものではないので、それは、個人的決定によってテリトリ一的に固定した文化関係を表現したものとはいえない。広い意味で理解される生活スタイルには、女性運動、自由運動、環境運動など種々の新たな社会運動の分野が含まれる。これらの生活スタイルは特定の日常的地理形成と強く関係しているので、地域アイデンティティの形成にとって重要な要素となりうる。

近代末期社会の主体重視の存在論との関係においては、主体が世界のなかに存在するというだけでなく、それと世界との関連（民間人、企業、国家機関）が関心の的となる。ここでは距離の短縮よりも、主体の能力が特に注目される。脱定着化メカニズムと結合した

生活世界<sup>29)</sup>では、テリトリー的なまとまりをもった生活様式は存在しない。アイデンティティをもった局地的伝統の崩壊がグローバル化の前提であり、自省性 (Reflexivität)<sup>30)</sup>をもった生活様式を特徴とする。それは、地域的条件よりも個人的能力による生活スタイルにおいて大きな選択の機会をもつものである。近代末期の生活様式は、グローバルな種々のネットワークと結合しているのので、すべての現実社会に通用する知識をもつことが重要である。その場合に、脱定着化しグローバル化した生活条件のもとでは、行為の要素として権力をとりあげるのはとくに必要なことといえる。

行為理論の検討の中では、新古典派経済理論までも含めて考察されているのが注目される。行為理論にも実践理論にも、Pareto, V. や Weber, M. の理論、決定論、合理的選択理論など種々なものが考えられるが、それらの行為理論は相互に補完的なものである。すなわち、①合理性追求理論 (zweckrationale Theorie) では経済人や合理的に行動する人間として、行為主体の能力が研究の対象となる。②規範中心的理論 (normzentrierte Theorie) では、規範的活動に対する主体の能力が問題となる。③意志疎通重視の理論 (verständigungsorientierte Theorie) は、種々の現実の領域形成に対する主体のもつ包括的能力をとりあげる。こうした情報人間の行為は、個人史に基づく知識の蓄えの上で行われる。

日常的地域化の類型については、種々の地域化が行為理論の立場から説明される。行為理論・構造化理論から導出された図2に示す6つの体系的分野<sup>31)</sup>の中では、各形態の日常的地理形成に関する研究成果は相互に関係しており、その関連性の考察が社会的現実の新たな説明を可能にする。

1) 生産と消費の地域化 日常的行為は経済的には配分的資源と密接に関連している。まずは、経済主体がいかなる条件のもとで、グローバル化した日常世界のなかでいかにふる

図2 地域化のタイプ

地 域 化		研 究 分 野
生産と消費の地域化	日常的	生産の地理 消費の地理
規範的政治的な地域化	日常的	規範学習の地理 政治的コントロールの地理
情報的に意味をもつ地域化	日常的	情報の地理 シンボル学習の地理

出典：Werlen (1997) S. 272 による。



まうのか（権力的成分を含むことなく）が問題となる。次には、配分的資源の導入がみられる。この段階では、主体は自然的物的所与条件や施設、財をコントロールするためにいかなる能力をもつのか、生産や消費において世界といかなる結びつきが許されるのか、が問題となる。現実のグローバル化した条件のもとでは種々の観点からの考察が必要であり、経済は文化的要素を含めて理解される。そこでは、配分的資源として物的所与条件や施設の所有・利用関係が明らかにされるが、そこに現れる権力関係にも特に注目すべきである。

2) 規範的政治的な地域化 規範的な日常的地理形成は権威的資源の側面と結びつく。行為の規範的成分と権威的成分とが一体化するときには、規範的な政治的地域化が問題となる。そうした地域化は、規範習得（学習）(normative Aneignung) として身体的負担を重視する分野を指向し、ここでもさまざまな結びつきが考えられる。身体や権力手段を利用して主体をコントロールする日常的地域化の研究は、「政治的コントロールの地理」といわれる。

3) 情報的に意味をもつ地域化 (informativ-signifikative Regionalisierung) 日常世界に関する意志疎通においては、主体のもつ知識の蓄えと重要度の評価が重要である。Giddens は情報習得の側面を無視し、解釈や重要度だけを問題にするが、日常的情報習得がどのように行われているかが問われるべきである。知識は解釈や評価の前提をなすからである。この行為モデルや規則という構造的側面から、「生活世界の情報的に意味をもつ地域化」なる研究領域が導出される。その中心に位置するのは、いうまでもなく「日常的な情報地理」の研究分野である。

以上のような3次元の考察によって、日常的地域化の社会地理学は、従来相容れなかった地理学の研究フィールドの総合的考察方法や学際的な結合能力をもつことになる。しかもさらに、その事実観察を通じて、グローバル化の条件のもとで社会科学・文化科学の研究の新たな統合をも促進することになる。

## 第6章 グローバルに地域化した生活世界 (285~421頁)

本章は136頁を占め、本書のうちでは最も紙数を割いた章である。①「生活様式と生活世界」、②「生産と消費の地域化」、③「規範的政治的な地域化」、④「情報的に意味をもつ地域化」の4節からなる。これらの問題はすでに第5章でも簡単に触れられているが、Werlen は新たな研究分野の問題点や研究方法について提示している。

伝統的に定められた生活様式では、地域は内部的に均質的であった。工業化の過程においても、グローバル世界の出現は「大衆化」によって説明され、「近代社会の個人化」といった特性はその視野から抹殺されていた。たしかに、人々は今日においても身体的には

狭い地域的状況の中で日常生活をしているが、近代末期社会の生活様式や生活世界はグローバル化の過程に組み込まれてきた。脱定着化は主体的な生活様式を増幅しており、グローバル化とともに社会的均質化が進行すると考えるのは正しくない。近代化以後における生活様式は、時空間的に定着した伝統的な生活様式に基づく地域内の均質性と地域間の多様性に代わって、同一場所においてさえますます多様化してきているのである。

こうしたローカルな生活スタイルの多様化への傾向は、産業革命以来恒常的に発展してきた。国家という社会組織のなかで生じた生活様式は、テリトリー的な調整のなかで「科学的地域地理学」の企画を妥当なものとしたが、脱定着化やグローバル化過程の進展とともに、経済、政治、文化の各分野における国家による利害調整への努力は限定されたものとなり、空間重視の地域地理学的な現実説明もレギュレーション理論も、現実への適合性を失ってきた。地域や国家の強い一体性は国家制度のもとでこれまで長期にわたって維持されてきたが、今日では民族と経済や国土間の一体性は認めがたい状況に変化している<sup>32)</sup>。

「遠隔地の消滅」となった経済分野においては、空間科学的な距離的説明はもはやその基盤を失ってきた。今日、日常世界の経済地理的な諸関係を深く理解するためには、距離とは別の要因を考慮しなければならない。生活様式の主体化によって、経済事象は個人単位の文化的なもの (Kulturalisierung) となった。プロテスタント倫理など西欧的文化基準が支配的であった時代には、経済学は経済外的条件をできるだけ無視することができたが、そのようなことはもはや不可能である。上述のように、今日では経済が文化的要素を含むことを科学的に考察する必要がある。そこでは、科学的経済学への改正を待つよりも、主体重視の地理学が経済研究の文化主義的な新方向をうち出すことになるかもしれない。

また、従来社会科学の研究においては生産分野が中心であったが、脱定着化した生活条件のもとでは生産分野と消費分野とは対等な関係となる。先端技術生産がグローバル化し脱定着化した条件の下でも、生産場所は常にある特定の空間に結びつけられている。しかし、分業形態や住民の社会的地位の分化やテリトリーの形成発展は、脱定着化メカニズムの上に革命的变化をもたらし、従来の地域分析や地域発展の概念を時代遅れなものにした。消費の地理も、この新しい社会存在論のなかで考えられねばならない。今日では、消費は世界経済の交換関係の構造化に対して決定的な役割を演じており、消費が生産の単なる結果現象であるという発想はもはや成り立たない。

先にも触れたように、距離パラメーターの意味も従来とは全く変化し、新古典派立地モデルの理想タイプも文化的な複数化のもとで変化を遂げてきた。買物の魅力は距離よりも生活スタイルによって決定され、それを無視した中心地理論はその効力を失った。消費者の買物行動にとっては収入による配分的資源の差異がとくに重要であり、それによって買

物地が選択されるので、同一地区の居住者が多くの買物地を指向することになる。また、モノや情報は広い時空間的断面を高度なモビリティとスピードをもって移動しており、なかでも情報はボーダーレスな活動を原則とする。

政治地理学の分野でも新しい見方が必要である。従来の政治地理学では、その地域化や生産・再生産プロセスについてはあまり注目しないで、むしろ政治地域の形成を所与のものとして受けとめ、その説明に大きなエネルギーを費してきた。たしかに、伝統的地理学においても権力と空間の関係はジオポリティークなどにおいて考察されたが、各社会が容器空間の中に存在するという点では共通していた。容器空間がある広がりをもたなければ社会は存在しえないので、空間と特定社会とは一体のものと考えられてきた。

さらにもう1つ重要なことは、社会状況の類型化に対する空間的カテゴリーの優位にある。伝統的発想においては、政治や権力の地理学は社会よりも空間を対象とし、社会を構成する主体が対象とはならなかった。そこでは、「モノの地理」や「土地」、「空間の位置関係」、「空間的全体」などが権利を要求し、行為に対して特定論理を押しつけることになった。新しい地理学ではそれとは逆に、「空間的なもの」が社会過程の中に隷属するかたちでいかにはめこめられるかを研究すべきである。

規範的地域化の研究ではテリトリー形成が問題となる。行為の空間的文脈への近接や離反が検討され、その中での行動様式の社会的調整が問題となる。規範的地域化の日常的社会地理に関する研究は、規範習得がテリトリー区分をいかにして可能にするのか、それが行為主体の状況にいかに依存しているかが解明されるべきである。規範的政治的地域が構造化理論の観点からいかに把握されうるかについて考察した研究では、フィンランドのPaasi (1986) が有名である。政治地域は、地域地理学の発想とは異なって制度的に設定されたものであり、行為の規則性の中で生産・再生産された社会的現実の部分領域なのである。

テリトリー設定は個人の行為や権力利用の手段をコントロールする。その分析は、権力の発生を解明し、これらの政治的地理形成の制度化された活動を調査することにある。コミュニケーションや情報伝達、知識習得におけるほど、伝統的生活様式と近代末期の生活様式との差異が鮮明に現れる生活分野は他にはない。マスメディアによるコミュニケーションこそがグローバル化と脱定着化の象徴であり、それらを可能にする最重要メカニズムであるからである。

伝統的生活様式では、主体の口コミによる伝達が同時代の人々に同一の解釈や類似の日常的行为形態をもたらし、比較的狭い範囲をもって地域的に差異のある生活世界を形成した。これに対して、近代末期の生活様式はコミュニケーションや情報伝達と強く関係する。電子メディアは相互に遠く離れた結果や成り行きが主体を媒介として相互に影響しうるよ

うに、ローカルレベルとグローバルレベルの情報を結合している。したがって、ローカルな行為や周りの人々の解釈にもグローバルな情報が関与するので、地域的に定着した知識はもはや存在しない。そこでは、彼らがいかなる条件のもとでいかなる方法でもって、日常的地理形成の情動的基盤を発展させるのかが重要な課題となる。

知識は本来ある程度身体的な意識的な記憶力と結びついたものであるが、近代末期の情報、身体以外の記憶能力や操縦装置の能力に依存する。情報の日常的地理の研究にとっては、主体がいかに多様な方法といかなる手段を用いて、必要な情報を選択しているかが問題となる。ここで重要なことは、情報による世界との結びつきを再構築することである。情報習得は種々の情報メディアや情報のチャネルを通じて行われる。発展段階的には、第1のタイプとしては文書形態、第2のタイプにはラジオ・テレビ、第3タイプとしてはインターネットがあげられる。

子供の社会化過程やその学習は、大部分が対面接触を前提とするので、コミュニケーションの状況は子供の社会地理にとってとくに重要である。身体を通じて直接えられる情報の地理では、子供の社会地理は社会化過程に関する諸条件の時空間的局面的研究に向うべきである。印刷機やタイプライターなどの発明は情報の大きな拡大を意味した。それによって、「記述」活動は完全なものとなり、そこから生ずる製品輸送は書籍や新聞などに限定されてはいたが、人々にとって身近なものとなった。この文書型のコミュニケーションは、書籍・雑誌時代における情報の合理化と産業化を可能にした。このような文献文化の発展は、時計の利用と相まって、これまでの循環型時間概念 (rekursive Zeitvorstellung) に代わって、形式的・直線的かつ普遍的な時間の理解を促進することとなった。

電子メディアの発達によってコミュニケーション史は第3の局面を迎えた。そこでは、コミュニケーションの画期的な前進がみられ、地理形成の新たな形態が可能となった。事件と場所と結びついた経験は時空間的に要領よくまとめられ、電子メディアはコミュニケーションのグローバル・ネットワークを構築した。電子メディアは遠くの事件や経験をリアルタイムで伝達することとなり、世界を一体とした「グローバルな村」を形成した。電子メディアが急進的な政治的变化を決定するわけではないが、それがいかなる意味をもつかは1989年に発生したドイツ再統一や東ヨーロッパの革命的变化をみれば明らかである。ネットワーク化した世界では、行為の発生状況は細目の単位に至るまで相互に結びつけられ、地理形成の新たな形態を可能にした。

ところで、日常会話や政治論議においては、「地域」は明らかにアイデンティティをもった所与のもののように用いられているが、それはある特定の観点から社会的に規定された地表領域として理解されるべきである。地域概念や利用される関係指標の定義によって、

その領域の特徴は異なったものとなる。このような地表の区分は、共通言語や共通の歴史など他地区に居住する人々と区別する指標による。日常世界的コミュニケーションでは、このバラバラな性格の克服のために、類似した人たちの存在という意味で地域が考えられる。しかし「地域的アイデンティティ」は、多くの点でバラバラで曖昧なものである。

今日のグローバル化した生活様式のもとでは、世界を理解することが最も重要なことといえる。日常的地理形成の分析はグローバル化と社会的日常行為の重要な次元として、空間科学・地域科学的パラダイム以外の科学的地理学にも幅広い研究課題を残している。そして、その問題をとりあげるのが第3巻（副題は「日常経験の調査結果の地理」）<sup>33)</sup>であるとして、第2巻は結論もなく終わっている。

### III. 「主体重視の社会地理学」に対する批判

#### 1. ヴァーレンの貢献部分

以上に示すように、Werlen は Giddens の構造化理論に多くを依拠しながら、近代末期の社会存在論に適合した行為重視の社会地理学の構築を試みた。彼の目的は、従来の空間科学的・空間重視の社会地理学に代わって、行為理論に基づく主体的行為によって説明される「日常的地域化の社会地理学」を構築することにある。

Bahrenberg の第2巻裏表紙の論評<sup>34)</sup>や Oßenbrügge (1997) の書評にみられるように、今日の社会存在論に適合した新たな学問体系の構築は、他の社会科学との共通言語を使用し、相互交流を円滑にすることになった。同様に Brenner (1998) も、グローバル化過程の地理学論争を今日の社会理論の中心課題と結びつけて説明することに成功しており、また一方では、ドイツ語圏読者を今日の英語圏の社会文化地理学の主要特性に近づけることになったとして高く評価する。

Hard (1998) も、人文地理学をポストモダン→グローバル化→脱定着化の社会存在論に適合させ、それからはずれた従来の地理学を一掃したことは「スラム解消」的な意義があるとしている。Blotevogel (1999) も、全面的とはいえないにしても次の4点について評価する。すなわち、①行為理論的社会地理学の概念はおおむね承認できる。しかし、これだけが社会地理学ではなく、革命的新鮮さを示すものとはいえず、この概念を採用しても、それが直接空間中心か行為中心かの二者選一とはならない。②1000頁にわたる Werlen の3冊（エルドクントリヘス・ヴィッセン第89巻、第116巻、第119巻）の著書は、体系的な理論構築を行い、認識論に基づいて説明しており、今日まで続く一理論面の弱い一地理学の経験主義を克服する唯一の意思表示といえる。社会地理学は理論的根拠を得ることによっ

て学問としての競争力を強め、実用的にも有効なものとなる。③形式的空間分析に基づく空間科学的な人文地理学は、概して実り豊かな成果をうることができず失敗したとみることは同感である。ただし、計量的手法は今や捨てがたい分析用具となっているので、私は Werlen のように「空間の悪魔払い (Raum-Exorzismus)」をしようとは思わない。④ Werlen は、人文地理学の新たな段階の認識論的基礎について検討している。それは、少なくともドイツ語圏地理学の致命的欠陥を補うことに貢献したといえる。たとえば哲学、物理学、心理学、社会学、経済学などでは空間に関する膨大な量の深い考察がみられるが、地理学では今なお「物的に充填された地表面」というナイーブな日常世界的な空間理解が支配的であるからである。

同様に Weichhart (1997) は、「Werlen のこの 2 冊の著書を通じて、地理学の方法論や理論に対する論議は新たな質の次元にまで高められた。過去 30 年間のろのろと歩んできた社会地理学の概念的進展は Werlen によって大きな刺激を受け、大きな太鼓の音によって揺り起こされた。最終的には、地域地理学の可能性や機会、限界について再び熱心な建設的かつ批判的な討論が行われることになるだろう。彼の考察は地理学の中心にある。彼の命題のいくつかは長くは続かないとしても、30 年前の Bartels の場合と同様に、これまでの研究でもって地理学のさらなる発展に本質的な影響を与えるであろう」と。

さらに, Oßenbrügge (1997) は次のような評価と批判を述べている。「彼の所論は科学的な中心課題に対する鋭いまなざしと解決可能性を特徴とする。「日常的地域化の社会地理学」は今日のドイツ語圏人文地理学の最も根強い根拠をもって定式化された概念であることは確かである。たしかに詳細については議論の余地があろうが、酌量すべきである」と。しかしその反面、「ただ私は、ここでとりあげた従来のほとんどすべての地理学の研究成果に対して、また構造化理論に属さない別の立場の地理学に対して、常に一方的に非難することには疑問を感じる。脱定着化という概念を用いて新しいものをドグマ的に推進しようとする目的設定が適しているかどうか、私には疑問に思われる。少なくともこの意味では、彼が地理学を理論的・概念的に再編する準備作業をなしたことは評価されるとしても、Bahrenberg の革命的貢献という推薦文は正しいものとは思えない」と述べている。

以上のように、Werlen の人文地理学はその学問的位置づけや理論化の試みについては高く評価される。人文地理学の方法論や理論的考察において新しい構想を示したことは、すべての批評家が注目したところである (Weichhart, 1997)。

## 2. ヴァーレンの社会地理学に対する批判

Blotevogel (1999) は上記の評価を行う一方で、厳しく批判する。その他にも

Weichhart (1997) や Arnold (1998) らの批判もあるので、それらを3つの分野に分けて整理すると次のようになる。

第1に、Werlenの空間存在論においては、空間概念に多くの誤りがある。

1) Blotevogel (1999) によると、Werlenは哲学史的論議をカント哲学までをとりあげ、19～20世紀の哲学史を全く無視した上で、Newton, I. や Kant, I. と Hettner, A.・Bartels, D.の間を直接関連づけて説明するのは適切でない。Hettner (1927) が Kant の認識論的空間概念を再びとりあげたというのは誤りであり、Hettner が依拠したのは当時を代表する Windelband, W.(1848～1915年) や Rickert, H. (1863～1936年) の科学哲学であった。Werlen は18世紀の存在論へ回帰することによって、行為重視の社会地理学の基礎をうることができる信じており、伝統的地理学の空間理解を奇妙に歪めて解釈することによって、彼のいう主体中心の世界関係と対峙させている。また、Popper, K.R. の三世界存在論 (Drei-Welten-Ontologie)<sup>35)</sup>についても誤解があり、Werlen は精神的な現象や社会的なもの、文化的なものは、社会的空間概念との関連のもとでは地表上に立地しないと考えている。しかし、Popper の第2世界に該当する意識の問題は人間の身体を通じて地表に固定的に現れるので、Blotevogel et al. (1986, 1987) の地域意識研究が不適切であるとす彼の主張は正鵠をえているとはいえない。

2) それに続いて Blotevogel (1999) は、前近代、近代、近代末期の時代区分にも無理があるという。社会発展論において、近代社会の空間的断片化による住民の社会的埋め込み (soziale Einbettung) の崩壊を脱定着化と呼び、前近代の拘束と近代末の空間的脱定着化とを比較対照しているが、ルネサンス期に生じた脱定着化などは無視されている<sup>36)</sup>。Arnold (1998) も同様に、脱定着化がみられるのは今日だけではないと考えている。彼のこうした時代区分が歴史的時期や社会生活の空間関係の時期設定に役立つかどうかは疑問であり、伝統的地理学やそれを支配する空間理解をもって前近代の名残りとするのは、地理学発展の歴史的事実に反する。

3) さらに、Werlen が「空間の悪魔払い」によって空間概念を放棄し、「空間を直接対象としない地理学」を主張するのは適切とはいえない (Blotevogel, 1999)。社会地理学はそうすることによって特殊な意味論に還元され、今日、環境社会学や環境生態学が克服しようとしている「環境のわからない人 (Umwelt-Blindheit)」に陥るからである。彼は行為的側面として主体中心の見方においてだけ環境を考えるため、Hard (1998) も指摘するように、人間・環境問題に十分に対処することができない。たとえば、環境は行為の危険 (Handlungsrisiko) としてのみとりあげており、第2巻の第6章2節3項 (Werlen, 1997, S.322～325) においてわずかに触れているにすぎない<sup>37)</sup>。

4) さらに Weichhart (1997) は, Werlen が空間性 (Räumlichkeit) を無視している点を指摘する。自然的物的世界においては, 身体やモノの位置性 (Lagerungsqualität) が発生にとって無視できない重要な役割を果たすが, これに対する配慮が欠けている。モノはある特定の位置関係において存在し, それによって機能的な動的なシステムが発生する。このような現象は空間性と呼ばれており, 同心円構造はその典型といえる。共在やロカールなどはこの空間性の1側面を示すが, Werlen は空間性に関する体系的な議論を行っていない。

第2には, 行為中心的考察の問題と「論議のスタイル」があげられる。5) 社会地理学は, 上述したように, 空間中心的ではなく行為中心的に考えるべきだとして論拠をあげて説明していることには, Blotevogel (1999) もある程度同意できるという。しかし, Giddens や Werlen の社会地理学が実際に社会地理学を研究する唯一の可能な方法であると考えることには賛成できない。Werlen は, 伝統的な空間中心主義や客観的実証主義的社会科学としての地理学に対してだけでなく, レギュラシオン理論 (Werlen, 1997, S.242) や経済学全体 (同, S.298ff) についてまで容赦なく攻撃し, 他の社会科学の広い分野を「有用性が乏しい」とか「還元主義だ」と非難し, 社会学のなかでも比較的特殊なものとして位置づけられる Giddens の方法論だけを社会地理学の基礎に利用するのは不遜というにもほどがある<sup>38)</sup>。ドイツ地理学会ボン大会の特別フォーラムの参加者のなかにも, そのような空気がみられたといわれる (Weichhart, 1997)。行為重視の社会地理学が論理的に稚拙なものというわけではないが, Werlen が自己の概念以外のすべてをことごとく批判するのは問題である<sup>39)</sup>。Werlen は主体的行為を重視するが, Blotevogel (1999) によれば, ポストモダンの思想家たちは, 今日, それとは反対に「自律的主体の崩壊」を中心的テーマとする状況にあるという。

6) Blotevogel (1999) も Arnold (1998) も行為主体に注目する。Werlen は集団や団体の主体的行為者を不問とし, 行為者として個人だけを強調するので, 制度や組織の意義が著しく露出不足に陥っているとする。Werlen によれば, 社会研究の唯一の重要な方法論は「行為によって社会を研究すること」(Werlen, 1995a, S.37) である。こうしたミクロ社会地理学の発想は許されるとしても, それにヘゲモニーを要求するのは問題であると Blotevogel (1999) はみる。主体的行為に焦点を合わせた一面的な奇妙な論述は, たとえば「消費の地理」(Werlen, 1997, S.313f) にみられる。消費は今日, 世界経済の交易において工業社会の生産関係にみられるほど決定的な重要性をもつといえるだろうか。多国籍企業や金融市場の役割など世界経済の構造やそのプロセスを過小評価するきらいがある。

7) Arnold (1998) も, アプローチの中心をなす主体, 構造, 社会, 生活スタイルなどの



概念の多くが曖昧なのは、経験的事実との整合性の欠如、客観性の不足にあるという。1960年代・70年代に発展を遂げたミュンヘン学派に対して、その理論的な脆弱さと実証主義的計量的な性格が Leng (1973) によって非難されたのに対して、Werlen の社会地理学はメタ理論的で、もう一方の対極に位置する。たとえば彼のいう主体は、それがもつ人間像についてはどこにも説明されておらず、主体がどんなものかは不明のままである。したがって、こうした理論的社会地理学を実証研究へ利用することは困難である。彼の社会地理学の構築プランの中心には「行為」と「構造」があるが、構造概念は一方では行為の中で概念化され、他方では行為の外、つまり制度的なものともみられるので2つの意味をもつはずである。これと平行して、構造主義によるレギュレーション学派地理学を「構造を重視し主体の役割を無視している」と Werlen が非難するのも問題である。

8) Blotevogel (1999) が、Werlen の説明では行為者の背後にある構造が視野から脱落する危険性があるというのも、上記のことと関連した問題である。最近数十年間においてはたしかに、社会学や経済学でもマクロレベルからミクロレベルの理論的發展がみられたが、マクロ的分析アプローチが時代遅れとなったというわけではない。構造や制度、組織は行為と補完関係にあり、人間的行為の秩序システムであり、調整システムでもある。彼の主張では、社会地理学は実証的社会学と同一となるが、他の隣接科学には全く眼を向けていない。彼によって大胆に絶対化された「主体中心によって脱定着化された近代末期社会」は経済史や社会史の研究成果を全く無視したものである。

9) Blotevogel (1999) によると、自然と環境や自然地理学と人文地理学の関係についても、彼の説明は一面的である。行為者はある程度馴らされた自然に関係しており、自然とは一見疎遠な中で生活している。われわれが今日「自然」と呼ぶもののほとんどは、1000年以上にも及ぶ人間活動によって「文化的なものにされ」、姿を変えられた地理形成の産物である。これらは、主体的行為にとっての先決条件をなしており、主体的行為を制限したり可能にしたりするものである。

10) Arnold (1998) によれば、グローバル化が日常的地域化に対していかに影響するかを示すことは重要な研究テーマであるが、他方では、グローバル化が主体の日常的地理形成を通じていかになされるかを説明することも重要である。しかし、グローバル化と地域化との仲介は彼の研究テーマとされていない。図2でみた6つの分野のうちあるものは地域的・国家的レベルにとどまり、他のものはグローバル化と日常的地域化のすべてにわたって種々の相互作用をなしている。グローバル化には地域的な差異があるし、主体の行為も一様ではないが、そうした問題を Werlen は不問に付している。

第3には、学問政策的意義について検討する。

11) 上述のように、行為重視の社会地理学は実証的社会学以外のなにものでもない。社会地理学がその道を進むとすればいくつかのシナリオが考えられるが、それが人文地理学のパラダイム・シフトを起こすことにはならないであろうと Blotevogel (1999) は考える。Arnold (1998) も、これらの概念の発見や新たな方法論が社会地理学の本質的な発展につながるとは思えないと述べている。Blotevogel はまた、Werlen が考えるように、伝統的な空間中心的な地理学の実用性がそんなに惨めな状態にあるとは考えていない。脱空間的社会地理学がより大きな成功のポテンシャルをもつというからには、その証明が必要である。地理学の成功は、空間指向かいなかよりも立派な研究が行われるかどうかにかかっている。

12) さらに、Blotevogel (1999) は地理学のパラダイム・シフトが生ずるためには、学界のおかれている状況が問題になるとみる。Bartels (1968) が空間科学的地理学を導入した1960年代末期には、当時支配的であった地理学のパラダイムに対して大きな不満が渦巻いていた。今日の人文地理学は多くの競合するパラダイムで満ちており、その大部分が共存状態にある。空間重視の社会地理学と行為重視の社会地理学のなかでどちらを選ぶかの問題ではなく、「空間崇拜主義 (Raum-Fetischismus)」と「空間の悪魔払い」との間になお十分に理論的に考えられ、実用に適した興味ある「空き地」が残されていると考えている。

#### IV. 筆者の印象と疑問点 — むすびにかえて —

以上が Werlen の地理思想に対する評価と批判である。Werlen が、英語圏人文地理学に比べて遅れていたドイツ語圏人文地理学<sup>40)</sup>において、その方法論的・理論的論議を提供したことは画期的出来事であった。上記のように多くの書評や論文が発表され、ボン大会で特別フォーラムが開催されたのは、その反響がいかに大きかったかを物語る。しかし、Werlen の主張には事実や学説の一方的な解釈、妥協を許さない独善的な態度、結論の一面的な偏りなどいくつかの欠点が含まれており、Werlen の地理思想は諸手をあげて賛成されているわけではない。このような批判を踏まえて筆者の印象と疑問点をあげるならば、次のようになる。

① Werlen は、今日の社会における「脱定着化した主体 (entankerte Subjekt)」の行為のもとでは伝統的人文地理学は時代遅れの存在であるとして、「行為重視の社会地理学」の構築を試みた。その説明は論理的であり、近代末期の新たな現実を踏まえた考察は評価されるが、Blotevogel (1999) が指摘したように、それは歴史的事実に十分には適合しないし、ポストモダンの哲学にも完全には妥当しない。Oßenbrügge (1997) もこの点を疑問

視する。さらに、Weichhart (1997) や Arnold (1998) にもみられるように、地球上の全地域がどこでも一様にグローバル化し、世界が同じような結びつきをもち、脱定着化しているわけではない。Werlen もその点はたしかに認めてはいるが、脱定着化した社会とそうでない社会の併存状況をいかに説明するかについてはなにも触れていない。一部の地域にしか通用しない理論が、人文地理学の新たなパラダイムとなりうるとは思えない。

② Werlen は、グローバル化が脱定着化を生じ人々の生活様式を多様化させたので、地域化による新たな地理形成がみられ、地域境界は不明瞭なものとなったと説く。ここでは、行政区画や学区以外には明確な地域設定は不可能になったようにみえる。しかし、個人の生活行為が完全に多様化したために、Bobek や Hartke がみたような社会集団的類型は全く考えられないであろうか。Werlen が第3章で述べたように、Gilbert (1988) の人文的要因に基づく地域形成や地域分化の存続を、脱定着化の観点から否定するのは適切とはいえないであろう。

社会経済の発展とともに組織や制度は複雑化し多様化しており、国家的組織は弱体化したとはいえ、存在しないわけではないし完全に消滅に向かっているわけでもない。特に日本についてはその感が強い。Brenner (1998) が指摘するように、主体的行為の多様化のみを強調して、国家的組織に対する考察が不十分といえる。

また、たとえ個人はグローバル化の影響下にあるとしても、身体をもった個人の行為には時間地理学的な制約がある。それは高齢者などの社会的弱者にとってはとくに重要な問題である。主体的行為の中にも、消費生活のように多様化が進んだ分野とそうでない分野とがあるはずである。情報技術の発達に基づく脱定着化の内容をさらに分析し、細かく検討する必要があるだろう。

さらにいえば、主体の行為には空間的類似性があり類型化がみられるし、日常的行為に影響する地域的条件も決して一様化したわけではない。地域間の境界はより不明瞭なものとなったとしても、地域的差異自体が完全に消滅したわけではない。たとえば、選挙における政党得票率には依然として地域的差異がみられる。地域間の結合にしても、ネットワークの強度には都市を中心として著しい差異がある。したがって、Werlen の説く主体的行為の地域化の問題だけでなく、地域的差異や地域間結合の問題は依然として存在しており、地理学の重要課題として存続するであろう。

③ Werlen は空間重視の発想を捨てて主体の行為重視の社会地理学に移行した。それは Köck (1997) が指摘するように、「これまで地理学の従属変数であった空間を独立変数としての社会や文化と交換して、従来の独立変数を従属変数におきかえ、社会や文化を社会的に強く説明する独立変数として空間をあげた」ものであった<sup>41)</sup>。行為理論によればモノ

は行為の条件であり、手段であり、行為の結果とみられる。空間科学的地理学以後の研究においても、空間や場所の理論よりも社会現象そのものの考察に対する関心が高まっており、行為重視の研究方向に向かっている。したがって、人文地理学を社会理論に接近させるために必要ならば、行為重視の社会地理学は原則として容認することができよう。

しかしその場合には、空間の中で物的条件はそれぞれの行為にとっていかなる意義をもつかが問われるべきである (Weichhart, 1997)。第3章で Werlen は、地域形成にとって「地表空間的条件はさしたる役割をもたず、空間的な構造化を目的とした社会的行為による社会過程の成果として物的メディアの配列を説明するためにのみ用いられる」と述べているが、主体の行為に影響を与える物的な要因について十分に検討する必要はないであろうか。Weichhart の指摘した空間性に関する問題について、Werlen は全く説明していない。Köck が、Werlen の研究は地理学のパラダイムに適合しないと考え、Hard (1998) が「そのような地理学はわれわれ地理学者にとってあまりにも困難なものではないか」とするのも、こうした理由によるものと考えられる。

④ Giddens の構造化理論では、「構造は主体的行為を規制するが、構造は主体的行為によってつくられる」という。たしかに、構造主義は主体のもつ地域形成能力を無視するが、社会や地域は人間によってつくられたものである。しかし、社会や地域はきわめて長い時間をかけて形成され、Weichhart (1997) が指摘したように、すべての地域形成営力が現代のわれわれと常に同一の方向に作用してきたわけではない。資本主義の発達以前に形成されその後変化・発展を遂げてきた集落構造が、今日のわれわれの行為に強い影響を与えているのである。さらに、Werlen は日常的行為を強調するが、地域形成に大きな影響をもつドイツ再統一のような非日常的事件は彼のいう社会地理学の研究対象にはならないのだろうか。これらの問題を排除した構造化理論には限界が感じられる。

⑤ Werlen は主体的行為を重視するが、Hard (1998) や Arnold (1998) が指摘するように、主体とはなにかが不明瞭である。図2で示したように6つの研究分野があるとしても、個人の他に集団や公権力や民間企業の経済活動などの主体としての行為は著しく異なるはずである。Blotevogel (1999) が指摘するように、Werlen は消費者としての主体的行為の脱定着化だけを重要視しており、生産関係の説明はきわめて貧弱である。ポストモダン期の到来によってフレキシブルな生産形態が導入され (友澤, 1995; 森川, 2000), それは企業組織やその立地形態の変化を通じて主体の行為を著しく変化させてきた。Werlen はレギュレーション理論を構造化理論として厳しく批判するが、Werlen の日常的地域化の社会地理学の説明がレギュレーション理論以上に説得力をもつであろうか。彼の概念の実践的方法論や技術的な組み替えは Werlen (1999) の中で考察されているはずで、第6章では示され

ていないので、具体的なことは不明である (Weichhart, 1997)。

⑥ Werlen は、第 2 章において伝統的地理学や空間科学的地理学を批判して行為重視の社会地理学の長所を強調するが、第 3 章の Buttimer, Gregory, Pred, Thrift らによる「新しい」地域地理学については、空間的アプローチと主体中心的な見方との中間にあって「地域化の社会地理学」の発達を助けたものとして、その役割を評価している。さらに、「そのような地域地理学は「地域化の社会地理学」の成果の上に構築されることになるだろう」と述べているが、この発言には抵抗が感じられる。新しい地域地理学の研究者が空間中心的な発想から脱出しないのは、地域地理学には地域の紹介や評価という目的があるため、そうした社会的有用性からみても、この一線は容易に越えられないように思われる<sup>42)</sup>。地域を重視しない「地域化の社会地理学」がはたして地域地理学の研究に役立つかどうか疑問である。

しかも、Brenner (1998) も指摘するように、「行為理論的に近い」研究だけを詳しく検討し、Massey, D. や Harvey, D., Sayer, A. などの研究についてはなんら触れていない。人文地理学のパラダイム・シフトを主張するものであるならば、このような扱いは不十分といえるであろう。行為重視の研究でもってのはたして人文地理学のほぼ全分野をカバーすることができるであろうかという疑問がある。

⑦ Weichhart (1997) が指摘したように、同心円構造のような空間的パターンに対する説明の欠如は、空間科学的地理学の排除からして当然起こりうる問題である。脱定着化によって地域が不明瞭なものとした近代末期においては、空間的秩序が失われるのは当然のことと考えられるからである。しかし、地理的現象の空間的パターンに関する考察を無視することは、人文地理学の努力してきた重要な部分を放棄することにならないだろうか。

要するに、Werlen が社会理論を踏まえて新たな社会地理学を構築しようとする意図は大いに認められるが、従来の地理学のパラダイムに代わる新たなものを形成するにはなお間口が狭いように思われる。Werlen は、社会理論に照らして人文地理学の概念や論理の整理を行い、他分野の研究を厳しく批判したので、彼の社会地理学を中心として、ドイツ語圏においても今後活発な議論が起こることは間違いないであろう。

#### [付記]

本稿の執筆に当たりご教示いただいた Blotevogel, H.H. 教授 (Duisburg 大学, ドイツ地理学会長) と Toepfer, H. 教授 (Bonn 大学), Meusburger, P. 教授 (Heidelberg 大学), レジュメのご校閲を願った Funck, C. 講師 (広島大) に厚くお礼申し上げます。また、ご親切にご校閲いただいた「地学雑誌」編集委のご意向に添ええなかったことをお詫びしたい。

注

- 1) キール大会事件直後の1970年代は、ドイツ語圏地理学者たちが議論に疲れた時期であったともいわれる(森川, 1997)。
- 2) これは、以前の広告では第3巻『日常的地域化の社会地理学—日常経験的調査結果—』と記されていたが、実際には第3巻とはせずに、Werlen (1999)のかたちで出版された。脱稿後の出版のため筆者は未見である。
- 3) 『エルドクントリヘス・ヴィッセン』第89巻の第1版は早く絶版となり、第2版が1988年に刊行後、半分程度増頁した第3版(3. überarbeitete Aufl. 462S.)が1997年に刊行された。また英訳が1993年にロンドンから出版されている。これについては Bahrenberg (1989) の書評がある。
- 4) 脱稿後編者 Meusburger 教授から本書をいただいたため、収録された Blotevogel(1999) 以外の論文はみえていない。
- 5) リチェンティアート (Lic.) は中世の大学の修士号に匹敵するもので、今日でもスイスには残存する。
- 6) Toepfer, H. 教授のご教示による。
- 7) Blotevogel 教授によると、Werlen は Giddens らとの関連において、「ポストモダン」概念に左右されない「近代末期 (spät-modern)」という術語を使用し、「ポストモダン」の使用を避けているという。
- 8) 社会地理学の研究は、産業資本主義における国家的制約の拡大とともに始まった。社会地理学は社会と地表空間との関係を調査し、社会過程や社会的所与の地理的様相を研究するという点では研究者の一致がみられる。しかし、社会が空間的な観点からいかに組織されているのか、社会の存在にとって空間条件はいかなる役割を演ずるのかといった問題に対する解答は、研究者によって異なる (Werlen, 1995b)。
- 9) 山本 (1981) によると、Hartke とミュンヘン学派の研究は、1950年代には農村研究が中心をなし農村の産業化への対応が主たるテーマであったが、1960年代には都市研究に移行し、住宅地研究が中心となった。しかし一貫しているのは、地域計画的な研究であった。
- 10) Werlen はこの概念の主役として Hettner をあげるが、伝統的地理学は1970年の「科学革命」を過ぎても生きていた。したがって、「Werlen 以前の地理学」がすべて伝統的地理学に含まれることもありうるわけで、時期的に限定された歴史的概念とはなっていない (Blotevogel, 1999)。
- 11) この発想には賛成できない人が多い (Blotevogel, 1999; Arnold, 1998)。Bahrenberg (1987) のように、地域意識の存在を認めない人もいるが、人々は日常生活圏とか郷土については特別な知識や感情をもっている。また、中小企業が新企業空間を形成するのは地元環境 (local milieu) が特別な意味をもつためだといわれている (森川, 2000)。
- 12) 本書では行動 (Verhalten), 行為 (Handlung), 人間活動 (menschliche Aktivität), 主体的行為者 (Akteur) など類似の用語が多く使用されている。行為とは目的重視の行動を指す。
- 13) 彼は、Werlen (1993) においてすでに「eine Geographie ohne Raum (空間なき地理学)」という表現を用いているが、やや厳しすぎ、誤解を招くおそれがあるので、「空間を直接対象としない地理学」と表現することにする。
- 14) 上述のように、Wirth (1981) では行為重視の地理学について説明しており、Fliedner(1993, S.213) は Wirth と Sedlacek, Werlen を行為理論的アプローチの研究者として扱っている。Werlen の社会地理学は Wirth の地理学と類似したものと考えられるが、なぜか Werlen は Wirth の地理学を Hartke に対するようには高く評価していない。
- 15) Werlen は Blotevogel らの地域意識の研究を地誌学の研究としてとりあげているが、Blotevogel 自身は社会地理学に関する研究と考えている (Blotevogel 教授の書簡による)。
- 16) 注11) に示すように、Bahrenberg (1987) は地域意識をもった空間を認めないが、彼の主張は極論とみられる。
- 17) Brenner(1998) は、Werlen が英語圏地理学の研究動向をドイツ語圏地理学者に詳しく紹介したことも本書の貢献の1つであるとしている。

- 18) Bahrenberg (1995)によると, Bobek u. Schmithüsen (1949)の地理学体系が新たに改善したのは, 空間的連結関係や位置関係を特に考慮した点にあり, 全体的には若干の拡大をただけで伝統的パラダイムを救済し固定させることになった。地理学の対象として地域を考えたが, 人間と自然との関係については触れていないという。
- 19) これにはマルクス主義地理学と Wallerstein, I. の世界システム理論の2つの流れが含まれる。
- 20) 森川 (1997) を参照。
- 21) この発想は地域地理学において等質地域, 機能地域, 地域変化を中心に考える Hoekveld, G.A. and G. 教授夫妻の発想と類似するよう見える (森川, 1998)。
- 22) 通常, 空間的なものと社会的なものとは必ずしも一致するとはいえず, その点では Pred の考え方には賛同できない。
- 23) これは Giddens の用いた概念であり (ギデンズ, 1998, p.210), 第4章に説明がある。
- 24) Werlen が空間科学的な世界理解について徹底的に批判したのは驚嘆に値するが, 厳しすぎるきらいがある。少なくとも Thrift に対する厳しい批判には別の見方も成り立つであろうと Weichart (1997) は述べている。
- 25) Fliedner(1993, S.219) は Giddens の構造化理論の地理学への導入について述べているが, そのなかにはなぜか Werlen の名はみえない。
- 26) Giddens に比べて Werlen は, 構造よりも行為を重視する傾向がさらに強いといえる (Arnold, 1998)。たとえば, Giddens では存在する階級や階級社会を Werlen は受け入れない。Giddens は階級社会に特有な不平等をなお整理されないものとして取り入れており, 十分に権利を与えられていない人々は決して特別重要な役割を演じないと考える (Giddens, 1992, S.45)。これに対して, Werlen の現実社会に対する理解は原子主義 (Atomismus) や個人主義の方向に進んでおり, 近代末期の脱定着化の最も重要な特性は, あらゆる社会階級や地域的に定着した社会階級, 社会形成の不平等を個人化することによって排除することにある (Werlen, 1997, S.252)。社会的不平等は, もはや生活世界に認められる大きな地位 (Großlage) の中で認められるものではなく, 時間的にも空間的, 社会的にも壊されている。生活形態や生活スタイルはグループや階級に特有のものとして分割されるのではなく, 主体に特定した現象として個人的決心の表現とみる。
- 27) ポストフォーディズム論では, グローバル化の進展は国民国家の弱体化のもとで, 同時に地域化 (ローカル化) を伴ったものとして理解されている (森川, 2000)。
- 28) 後述のように, これには Blotevogel (1999) の強い批判がある。
- 29) 生活世界は現象学で用いられるもので, 日常的な社会活動において通常見られる当たり前の宇宙である。それは毎日の行為がなされている, 生活諸形式の説明以前の集合といわれる (ギデンズ, 1998, p.311)。
- 30) Reflexivität や reflexiv は Giddens の術語で, 反省, 内省作用, 自省性, 反照性, 自己言及性, 再帰性などの意味をもち, レフレキシヴィティと書かれたものもあるが (ギデンズ, 1998, p.401), 個人的能力によって自分で考えて対応すると解釈して, ここでは自省性を用いる。
- 31) 第2図に示すシンボル習得は, 「ふるさと感情」など感情的な地域意識の形態である。
- 32) Brenner (1998) は, 主体を重視する Werlen の社会地理学では社会的なものが個人に還元され, 近代国家や資本主義世界経済の社会制度的構造が個人の集合体として考察される傾向があり, 国家的スケールでの地域変化に関する考察が乏しいと批判する。
- 33) 上述したように, Werlen (1999) にタイトルを変更して出版された。
- 34) 本書の裏表紙に本の推薦文 (Pressestimme) として書かれたもので, Bahrenberg は, 「いわゆる理論計量革命が成功したのは方法的用具的な点においてだけであった。それに対して, Werlen は行為理論的観点から革命を成し遂げた」と述べている。しかし, Bahrenberg (1989) は Werlen の学位論文 (Werlen, 1987) についてはかなりきびしく批判しているにもかかわらず, なぜこのような推薦文になるのか理解できない。Bahrenberg は本書に対する書評を発表していない。
- 35) Popper のいう第1世界は物理学的世界, 第2世界は心理的生活における精神的世界, 第3世界は客観的な空想の世界を指す (Blotevogel, 1999)。
- 36) Blotevogel は歴史の大変化の時代には脱定着化がみられるものと解釈する。Werlen は脱定着化メカ

- ニズムとして文書、貨幣、技術製品をあげているが、実際にはインターネットまで発達した現代だけに限定して考えているようにみえる。
- 37) Blotvogel (1998) は、1990年代の人文地理学には人間生態学的革命が発生するかもしれないと考えているが、Werlen の地理学はそうした環境重視の地理学への対応に疑問がある。
- 38) Weichhart (1997) も同様な点をあげて批判している。さらに Brenner (1998) も、ニュートンの空間概念にとどまる地理学者とともに、構造理論についてそれがもつ本質的な欠陥にはあまり触れることなく、自己の立場と異なるからといって重要視しないのは誤っていると批判する。ただし、上述のように、Werlen は構造主義のもつ欠点として「主体のもつ形成能力の無視」を考えているようである。
- 39) Bahrenberg (1989) も、行為理論的概念や行動科学、システム分析、社会構造などの他のアプローチに対する位置づけについて、Werlen は自己のアプローチを優先するとみているが、相互に補完的關係にあるのではないかと述べている。
- 40) Bobek (1972) や Blotvogel (1996), Werlen (1997, S.79) は、ドイツ語圏地理学が英語圏地理学に比して立ち後れた状態にあることを認めている。
- 41) 上述のように、Werlen は「コペルニクスの転回」をしたのは Hartke であったとするが、Köck (1997) は Hartke について触れていない。
- 42) Werlen (1997, S.125) は新しい地域地理学が空間重視であることを非難しているが、Werlen (1993) では、「今日の社会条件に適合するためには、これまでの地域地理学は少なくとも行為重視の新構想でもって補われるべきである。地域地理学はもはや空間やその特性を指向するのではなく、「地域化の社会地理学」としてより適したものとして特徴づけられる。適当な実証的研究にとってローカルやグローバルなレベルでの地域化の再建が重要である」と述べており、論述にやや差異がみられる。

## 文 献

- アンソニー・ギデンズ著、藤田弘夫監訳(1998)：『社会学の思想1，社会理論と現代社会学』青木書店，406p.+21p.
- 友澤和夫 (1995)：工業地理学における「フレキシビリティ」研究の展開。地理科学，vol.50, pp.289-307
- 森川 洋 (1997)：ドイツにおける地誌学の研究動向。地誌研年報，vol.6, pp.15-50
- 森川 洋 (1998)：英語圏諸国における地理学の研究動向－地誌学を中心として－。広島大学総合地誌研究叢書，vol. 32, 76p.
- 森川 洋 (2000)：ヨーロッパにおける企業間ネットワークの研究動向。地理科学，vol.55, pp.47-66.
- 山本健児 (1981)：ある社会地理学の軌跡－ハルトケ学派の場合－。人文地理，vol.33, pp.334-351
- Arnold, H.(1998): Kritik der sozialgeographischen Konzeption von Benno Werlen. *Geogr. Zeitschr.*, 86. Jg., S.135-157
- Bahrenberg, G.(1979): Anmerkungen zu E. Wirths vergeblichen Versuch einer wissenschaftstheoretischen Begründung der Länderkunde. *Geogr. Zeitschr.*, 67.Jg., S.147-157
- Bahrenberg, G.(1987): Unsinn und Sinn des Regionalismus in der Geographie. *Geogr. Zeitschr.*, 75.Jg., S.149-160
- Bahrenberg, G.(1989): Literaturbesprechungen. Werlen, B.: Gesellschaft, Handlung und Raum. *Erdkundliches Wissen*, Bd.89, 1987. *Geogr. Helvetica*, 44. Jg., S.57-58
- Bahrenberg, G.(1995): Der Bruch der modernen Geographie mit der Tradition. Hönsch, I. u. Wardenga, U.(Hrsg.): *Kontinuität und Diskontinuität der deutschen Geographie in Umbruchphasen*. Münstersche Geogr. Arbeiten, Nr.39, S.151-159
- Bartels, D.(1968): *Zur wissenschaftstheoretischen Grundlegung der Geographie des Menschen*. Geogr. Zeitschrift Beihefte, 225S.
- Bartels, D.(1980): Die konservative Umarmung der "Revolution". *Geogr. Zeitschr.*, 68. Jg., S.121-131
- Blotvogel, H.H.(1996): Aufgaben und Probleme der Regionalen Geographie heute-Überlegungen zur



- Theorie der Landes- und Länderkunde anlässlich des Gründungs-Konzepts als Instituts für Länderkunde, Leipzig. *Ber. z. deutsch. Landesk.*, Bd.70, S.11-40
- Blotevogel, H.H.(1998): *Geographische Erzählungen zwischen Moderne und Postmoderne—Thesen zur Theoriediskussion in der Geographie am Ende des 20. Jahrhunderts.* Institut für Geographie Diskussionspapier 1/1998, Univ. Duisburg, 26S.
- Blotevogel, H.H.(1999): *Sozialgeographischer Paradigmawechsel? Eine Kritik des Projekts der handlungsorientierten Sozialgeographie von Benno Werlen.* Universität Duisburg, Institut für Geographie Diskussionspapier, 1/1999, 51S.
- Blotevogel, H.H., Heinritz, G. u. Popp, H.(1986): Regionalbewußtsein. Bemerkungen zum Leitbegriff einer Tagung. *Ber. z. deutsch.Landesk.*, Bd. 60, S.103-114
- Blotevogel, H.H., Heinritz, G. u. Popp, H.(1987): Regionalbewußtsein –Überlegungen zu einer geographisch-landeskundlichen Forschungsinitiative. *Inform. z. Raumentw.*, H. 7/8-1987, S.409-418 (Werlen, 1997 による)
- Bobek, H.(1972): Die Entwicklung der Geographie—Kontinuität oder Umbruch? *Mitt. d. Österreich. Geogr. Gesell.*, 114. Jg., S.3-18 (石井素介訳：地理学の発展—連続か断絶か？地理, 19-1, 11-30)
- Bobek, H. u. Schmithüsen, J.(1949): Die Landschaft im logischen System der Geographie. *Erdkunde*, 3. Jg., S.112-120
- Bradshaw, M.(1990): New regional geography, foreign-area studies and Perestroika. *Area*, vol. 22, pp.315-322
- Brenner, N.(1998): Rezension Werlen: Sozialgeographie. alltäglicher Regionalisierungen. Bd.2: Globalisierung, Region und Regionalisierung. 1997. *Tijdschr. v. Econ. Soc. Geogr.* vol.89, pp.337-339
- Buttimer, A.(1969): Social space in interdisciplinary perspective. *Geogr. Rev.*, vol. 59, pp.417-426
- Buttimer, A.(1974): *Values in geography.* Asso. Amer. Geogr., Resource Paper, vol.24 (Werlen,1997 による)
- Danielczyk, R. u. Wiegand, C.C.(1987): Regionales Alltagsbewußtsein als Entwicklungsfaktor der Regionalentwicklung? *Inform. z. Raumentw.*, H.7/8-1987, S. 441-449 (Werlen,1997 による)
- Danielczyk, R. u. Helprecht, I.(1989): Ruhrgebiet. Region ohne Gegenwart? Sedlacek, P.(Hrsg.): Programm und Praxis qualitativer Sozialgeographie. *Wahrnehmungsgeogr. Studien z. Regionalentw.*, Bd. 6,S.101-132 (Werlen,1997 による)
- Danielczyk, R. u. Krüger, R.(1990): Ostriesland: Regionalbewußtsein und Lebensformen. Ein Forschungskonzept und seine Begründung. *Wahrnehmungsgeogr. Studien z. Regionalentw.*, Bd.9 (Werlen,1997 による)
- Eisel, U.(1980): *Die Entwicklung der Anthropogeographie von einer "Raumwissenschaft" zur Gesellschaftswissenschaft.* Kassel. (Werlen, 1997 による)
- Fliedner, D.(1993): *Sozialgeographie. Lehrbuch der Allgemeinen Geographie.* Walter de Gruyter, Berlin/ New York, 718S.
- Giddens, A.(1981): *A contemporary critique of historical materialism. vol. 1. Power, property and the state.* Macmillan, London (Werlen, 1997 による)
- Giddens, A.(1988): *Die Konstitution der Gesellschaft. Grundzüge einer Theorie der Strukturierung.* Frankfurt a.M. (Werlen,1997 による)
- Giddens, A.(1992): *Kritische Theorie der Spätmoderne.* Wien. (Arnold 1998 による)
- Gilbert, A.(1988): The new regional geography in English and French-speaking countries. *Progress in Human Geography*, vol. 1, pp.208-228
- Gregory, D.(1978): *Ideology, science and human geography.* Hutchinson, London
- Gregory, D.(1982): *Regional transformation and industrial revolution: a geography of Yorkshire Woollen Industry.* London (Werlen,1997 による)
- Hard, G.(1997): Literaturbesprechungen: Werlen, B: Sozialgeographische alltäglicher Regionalisierung

- gen ( Bd.1: Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum). Erdkundliches Wissen Bd.116, Stuttgart,1995.  
*Geogr. Helvetica*, 52. Jg., S.66-67
- Hard, G.(1998): Eine Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. *Erdkunde*, 52. Jg., S.250-253
- Hartke, W.(1956): Die "Sozialbrache" als Phänomen der geographischen Differenzierung der Landschaft. *Erdkunde*, 10. Jg., S.257-269
- Hartke, W.(1959): Gedanken über die Bestimmung von Räumen gleichen sozialgeographischen Verhaltens. *Erdkunde*, 13. Jg., S.426-436
- Hartke, W.(1962): Die Bedeutung der geographischen Wissenschaft in der Gegenwart. *Tagungsberichte und Abhandlungen des 33. Deutschen Geographentages in Köln 1961*, S.113-131 (Werlen,1997 による)
- Hettner,A.(1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. Ferdinand Hirt, Breslau. 463S.
- Klüter, H.(1986): *Raum als Element sozialer Kommunikation*. Gießener Geogr. Schriften, Bd.60. (Werlen,1997 による)
- Köck, H. (1997): Die Rolle des Raumes als zu erklärender und als erklärender Faktor. Zur Klärung einer methodologischen Grundrelation in der Geographie. *Geogr. Helvetica*, 52. Jg., S.89-96
- Krüger, R.(1986): Heimat: heile Welt? in: *Einblicke. Forschungen an der Universität Oldenburg*, Bd.3, S.25-28 (Werlen, 1997 による)
- Krüger, R.(1988): Die Geographie auf der Reise in die Postmoderne? *Wahrnehmungsgeogr. Studien z. Regionalentw.*, Bd.5 (Werlen,1997 による)
- Leng, G.(1973): Zur "Münchener Konzeption der Sozialgeographie. *Geogr. Zeitschr.*, 61. Jg., S.121-134
- Lipietz,A.(1992): *Towards a new economic order*. Cambridge (Werlen,1997 による)
- Meusburger, P. Hrsg.(1999): *Handlungszentrierte Sozialgeographie. Benno Werlens Entwurf in kritischer Diskussion*. Erdkundliches Wissen, Bd.130, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 269S. (未見)
- Øbenbrügge, J.(1997): Rezensionenartikel: Werlen, B.: Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.1 und Bd.2 (Erdkundliches Wissen, Bd.116 u. Bd.119), *Zeitschr. f. Wirtschaftsgeogr.*, Bd. 41, S.249-253.
- Paasi,A.(1986): The institutionalisation of regions: framework for understanding the emergence of regions and the constitution of regional identity. *Fennia*, vol.164, pp.105-146
- Pohl, J.(1993): *Regionalbewußtsein als Thema der Sozialgeographie. Theoretische Überlegungen und empirische Untersuchungen am Beispiel Friaul*. Münchner Geographische Hefte, Nr.70 (Werlen,1997 による)
- Pred, A.R. (1984): Place as historically contingent process. *Ann. Amer. Asso. Geogr.*, vol.74, 279-97
- Pred, A.R.(1986): *Place, practice and structure. Social and spatial transformation in southern Sweden 1750-1850*. Towata, New Jersey, Barmes and Noble, Cambridge (Werlen,1997 による)
- Pudup, M.B.(1988): Arguments within regional geography. *Progress in Human Geography*, vol.12, pp.369-390
- Thrift,N.(1983): On the determination of social action in space and time. *Environment and Planning D, Society and Space*, vol.1, pp.23-56
- Vidal de la Blache, P.(1903): *Tableau de la géographie de la France*. Paris (Werlen,1997 による)
- Weichhart, P.(1996): Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum—Benno Werlens Konzept einer Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. *Mitt. d. Österr. Geogr. Ges.*, 138. Jg., S.270-273 (未見)
- Weichhart, P.(1997): Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Benno Werlens Neukonzeption der Humangeographie. *Mitt. d. Österr. Geogr. Ges.*, 139. Jg., S.25-45
- Werlen, B.(1987): *Gesellschaft, Handlung und Raum: Grundlagen handlungstheoretischer Sozialgeographie*. Erdkundliches Wissen, Bd.89, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 314S.(2. Aufl.1988, 314S., 3. Aufl.1997, 462S.) Engl. Übersetz.: *Society, action and space. An alternative human geography*. London, 1993 (Wer-

- len,1997 による)
- Werlen, B.(1993): Gibt es eine Geographie ohne Raum? Zum Verhältnis von traditioneller Geographie und zeitgenössischen Gesellschaften. *Erdkunde*, 47. Jg., S.241-255
- Werlen, B.(1995a): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.1: Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum*. Erdkundliches Wissen, Bd.116, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 262S.
- Werlen,B.(1995b): Landschaft, Raum und Gesellschaft. Entstehungs- und Entwicklungsgeschichte wissenschaftlicher Sozialgeographie. *Geogr. Rundschau*, 47. Jg., S.513-522
- Werlen, B.(1997): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierung. Bd.2. Globalisierung, Region und Regionalisierung*. Erdkundliches Wissen, Bd.119, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 464S.
- Werlen, B.(1998): *Sozialgeographie. Eine Einführung*. Paul Haupt Verlag, Bern (未見)
- Werlen, B.(1999): *Die Geographien des Alltags. Empirische Befunde*. Erdkundliches Wissen, Bd.121, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, Ca.250S. (未見)
- Werlen, B. u. Wälty, S. (Hrsg.)(1995): *Kulturen und Raum. Theoretische Ansätze und empirische Kulturforschung in Indonesien*. Ruediger Verlag, 408S. (未見)
- Wirth, E.(1979): *Theoretische Geographie. Grundzüge einer theoretischen Kulturgeographie*. B.G. Teubner, Stuttgart, 336S.
- Wirth,E.(1981): Kritische Anmerkungen zu den wahrnehmungszentrierten Forschungsansätzen in der Geographie. *Geogr. Zeitschr.*, 69.Jg., S.161-198

## **Die geographischen Gedanken von Benno Werlen – unter besonderer Berücksichtigung der “Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierung. Bd.2” –**

**Hiroshi MORIKAWA**

In seiner Habilitationsschrift (Erdkundliches Wissen, Bde.116, 119 und 121) hat Werlen darauf hingewiesen, daß einige der klassischen humangeographischen Begriffe, die in der traditionellen Gesellschaft bisher benutzt wurden, in der spät-modernen Gesellschaft ihre ontologischen Grundlagen verloren haben. Da er die Handlungen der entankerten Subjekte als alltägliches Geographie-Machen ansieht, schlägt er “die Geographie ohne Raum” vor. So hat sein Werk in der deutschsprachigen Geographie die größte Sensation in den letzten 30 Jahren seit Bartels(1968,1970) erregt. Auf dem Geographentag Bonn 1995 hat auf Anregung von P. Meusbürger ein als Experiment gestartetes Diskussionsforum “Autoren stellen sich der Kritik” stattgefunden; dort hat er eine Auseinandersetzung mit H. H. Blotevogel und J. Oßenbrugge geführt, und das Forum ist für zahlreiche Teilnehmern zu einem der wichtigsten Ereignisse der Tagung geworden.

Obwohl die auf der Strukturationstheorie von A. Giddens basierende Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierung von Werlen als sozialwissenschaftlich orientierte Entwicklung der Humangeographie meistens hochgeschätzt worden ist, wurde sie gleichzeitig stark kritisiert.

Nachdem ich den Inhalt des Buches “Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.2” sowie der kritischen Aufsätze, wie Blotevogel(1999), Weichhart (1997) u. a., zusammenfassend vorgestellt habe, habe ich Eindrücke und Fragen dazu wie folgt geäußert.

1. Werlen hat aufgrund der räumlich verschiedenartigen Handlungen der entankerten Subjekte die handlungszentrierte Sozialgeographie konstruiert. Die Menschen leben aber noch nicht in allen Teilgebieten der Welt gleichermaßen in solchen Lebensformen, so daß die Gesellschaften mit entankerten Lebensformen und diejenigen mit noch traditionellen verankerten Lebensformen auf der Erde nebeneinander vorhanden sind.

In seinem Werk hat Werlen solche Erscheinungen nicht in Betracht gezogen sondern nur den Entankerungsmechanismus erklärt.

2. Werlen behauptet, daß die Subjekte aufgrund ihrer mannigfaltigen Handlungen durch den Entankerungsmechanismus völlig aus der räumlichen Kammerung gelöst worden sind. Sind dabei die Sozialgruppen, wie sie von H. Bobek und W. Hartke gezeigt wurden, total verschwunden, obwohl unser Leben von unserem Körper und seiner Time-Geography noch immer in starkem Maße beschränkt wird? Es scheint mir, daß die räumliche Grenze bzw. die räumlichen Differenzierungen, wenn auch ausgeblendet, noch vorhanden sind, wie es beispielsweise bei den regionalen Unterschieden der Stimmenraten jeder Partei bei der Wahl gesehen werden kann. Es wird nötig sein, die Struktur der Entankerung noch ausführlich zu analysieren.

3. Wie oben erwähnt, behauptet Werlen, daß das Forschungsobjekt der Humangeographie den Paradigmenwechsel von der raumzentrierten zur handlungszentrierten Geographie vollziehen soll. Dabei kann man den für die traditionelle Geographie als wichtigen Forschungsgegenstand angesehene Raummuster, wie etwa räumliche Strukturen mit gleichem Kern, nicht mehr berücksichtigen. Dürfen wir in der neuen Humangeographie solche Erscheinungen übergehen?

4. Nach der Strukturierungstheorie von A. Giddens beeinflußt die gesellschaftliche Struktur die subjektiven Handlungen, während die erstere von der letzteren konstruiert wird. Sicherlich kann man sagen, daß Gesellschaft und Raum von menschlichen Handlungen konstruiert werden. Aber es brauchte lange Zeit bis zur Entstehung der heutigen Situation, so daß nicht alle Kräfte immer in gleicher Richtung wie heute wirken könnten. In der Gegenwart benutzen wir die Siedlungsstruktur, die vor der kapitalistischen Entwicklung gebildet und bei uns ziemlich verbessert wurde; sie spielt in unserem Leben eine wichtige Rolle. Also kann man nicht sagen, daß die Strukturierungstheorie für die Bildung von Gesellschaft und Raum immer unmittelbar eine beherrschende Rolle spielt.

5. Wie Hard(1998) zeigt, sind die in sechs Forschungsbereiche gegliederten Erklärungen der subjektiven Handlungen in Band 2 nicht ausreichend, wenn sie auch in "Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.3" ausführlich erklärt werden konnten. Blotvogel(1999) kritisiert, daß die Erklärung des Konsums die von Produktion und Produkt überwiegt. Es ist bekannt, daß sich die Produktionsformen und organismen in

spätmoderner Zeit durch die Einführung des flexiblen Produktionssystems in stärkerem Maße verändert hat. Werlen hat die Regulationstheorie als eine Art traditionelle Strukturtheorie streng kritisiert, aber kann er die heutige Produktionssituation besser als die Regulationstheorie erklären?

6. Obwohl Werlen es positiv bewertet, daß die Entwicklung der neuen Regionalgeographie in englischsprachigen Ländern seiner Konstruktion der Sozialgeographie geholfen hat, beschreibt er weiter, daß die neue Regionalgeographie zukünftig mit Hilfe der Erfolge der von ihm vorgeschlagenen Sozialgeographie konstruiert werden soll. Da die Aufgabe der Regionalgeographie eigentlich in der Vorstellung und Beurteilung einer Region liegt, scheint es mir, daß "die Regionalgeographie ohne Raum" dafür nicht passend ist. Problematisch ist dabei, warum Werlen die Ergebnisse von D. Massey, D. Harvey, A. Sayer u.a., die nicht in enger Verbindung mit der Handlungstheorie stehen, außer Acht gelassen hat.

Zusammenfassend stelle ich meinen Eindruck wie folgt dar. Obwohl wir der Absicht von Werlen, anhand der Gesellschaftstheorie eine neue Sozialgeographie zu konstruieren, zustimmen können, scheint es mir, daß seine Sozialgeographie als neue Humangeographie im Forschungsbereich noch zu klein oder zu eng ist. Da Werlen einerseits zur Neubildung und Ordnung der humangeographischen Begriffe beigetragen und andererseits die Nachbardisziplinen scharf kritisiert hat, wird sich der Diskurs um die Humangeographie zukünftig sicher weiter entwickeln.